東京国立博物館蔵『将軍記』解題と翻刻（その一）

――豊臣秀吉伝　上之一、上之二――

長谷川　泰志

解　題

一　はじめに

従来、『将軍記』が浅井了意の作であろうことは、『増補書籍目録』（寛文十年刊）以来の各書籍目録に「松雲士誌之」とあるを拠所とするに留まっていた。同書に序跋署名なきためである。そして、内容面では『古今書籍題林』（延宝三年刊）に「家譜ヲ和語ニ改タリ」とあるをもって、林羅山の漢文著述『将軍家譜』の和訳に過ぎぬとの位置付けが支配的であった。しかし一方、市古夏生氏によって、同書が同じく了意の怪異小説『伽婢子』に多く利用されていることが明らかにされるなどの重要な指摘もなされている。[1] この時期の了意の仕事の側面、あるいは豊臣秀吉伝の部一つをとっても、その後の太閤伝承[2]の流布に関係したる側面等、看過できぬ一面を持っている著述であると考える。

しかしながら、その基礎調査は充分とは言い難く、そもそも了意の署名ある版本の所在についての報告は寡聞にして知らない。近年江本裕氏によって、吉田幸一氏御所蔵『将軍記』（三巻七冊）の刊記に「瓢水子松雲処士述」とあるとの貴重な御指摘があり、了意作であることが確認せられた。[3] 同本は『将軍記』全十六巻十七冊のうちの一部、豊臣秀吉伝であると考えられるが、その御指摘に導かれて、本稿では了意署名入りの完本たる東京国立博物館所蔵本について些かの考察と翻刻を行うものである。なお、『国史叢書』に既にある翻刻の底本は、了意無署名本にして入木訂正等を施した後修本であり、この差異を明確にすることも目的の一つである。また筆者の当面の関心事から豊臣秀吉伝の部から翻刻を始め、且、本稿では紙幅の制約上その一部に留め、次号以降引き続き分割掲載の予定であることをお断りしておく。

二　底本と諸本について

『国書総目録』には『将軍記』の諸版として、寛文四年（一六六四）版、寛文九年（一六六九）版、宝永四年（一七〇七）版の三種を記すが、寛文四年版のうち今回確認し得たものは次の通りである。（　）内は函架番号を示す。

- 東京国立博物館蔵本（と一三七六）
- 国立国会図書館蔵本（一七／一三二／四二）、（二一〇／一〇／一三八）
- 内閣文庫蔵本（一四八／一一）、（一四八／六）
- 宮内庁書陵部蔵本（二七一／二三）
- 東京芸術大学付属図書館蔵本（五七一／七）
- 国文学研究資料館蔵本（ヤ二／二七／一～六）

このうち底本は、唯一「瓢水子松雲処士述」の署名を有する完本であった。

まず、底本の書誌的事項の大略を記す。

所在　東京国立博物館（と一三七六）

装幀　大本、袋綴、十六巻十七冊。巻二・三・四、及び巻七・八がそれぞれ合綴。

表紙　丹色表紙、二重七宝繋ぎ（型押）。縦二五二×横一七三ミリ。

題簽　左肩に後補書題簽「将軍記　壱（～十三）、上之一（～下三）」と墨書。縦一七〇×横四一ミリ。

内題と柱刻（①～⑰は第何冊目かを示す）

〈内題〉　〈柱刻（書名・巻数…丁付）〉

① 巻一……本朝将軍記一……将軍記一……一～卅六
② 巻二……本朝将軍記二……将軍記二……一～十二
② 巻三……本朝将軍記三……将軍記三……一～十五
② 巻四……本朝将軍記四……将軍記四……一～廿一
③ 巻五……本朝将軍記五……将軍記五……一～卅三
④ 巻六……本朝将軍記第六……将軍記六……一～卅三
⑤ 巻七……京都第二代第七……将軍記七……一～廿六
⑤ 巻八……京都第四代第八……将軍記八……一～廿一
⑥ 巻九……本朝将軍記第九……将軍記九……一～卅六
⑦ 巻十……将軍記第十……将軍記十……一～卅三
⑧ 巻十一……本朝将軍記第十一／織田信長公…将軍記十一……一～卅八
⑨ 巻十二……本朝将軍記第十二…将軍記十二……一～卅一
⑩ 巻十三……本朝将軍記第十三…将軍記十三……一～卅九
⑪ 巻十四の一…本朝将軍記上之一／豊臣秀吉…将軍記上之一……一～卅九
⑫ 巻十四の二　…（なし）……将軍記上之二……一～卅九
⑬ 巻十五の一…本朝将軍記中之一／

豊臣秀吉伝…将軍記中之一……一～卅四
⑭ 巻十五の二…本朝将軍記中之二…将軍記中之二……一～卅八
⑮ 巻十六の一…本朝将軍記／
豊臣秀吉伝之下…将軍記下一……一～卅
⑯ 巻十六の二…本朝将軍記……将軍記秀吉下二…一～卅八
⑰ 巻十六の三…本朝将軍記……将軍記秀吉下三…一～卅四

匡郭　無枠。挿絵の丁のみ四周単辺。
本文　漢字平仮名交じり。振り仮名・濁点あり。句読点なし。
行数　各半丁十一行。
丁数と挿絵（①～⑰は第何冊目かを示す）
〈丁数〉〈挿絵〉
① 巻一……三十五丁…4オ、7ウ・8オ、11ウ、15オ、18ウ、（第27丁欠）23オ、28オ、28ウ、33ウ、36オ
② 巻二……十二丁……4ウ、8オ、10ウ
巻三……十五丁……2ウ、5ウ、9オ、12オ、15オ
巻四……二十一丁…3オ、8ウ、12オ、14オ、19ウ
③ 巻五……三十三丁…2オ、6オ、8オ、11オ、16ウ、19ウ、23ウ、30オ
④ 巻六……三十三丁…4オ、15オ、19オ、21ウ、25ウ
⑤ 巻七……二十六丁…4オ、8オ、14オ、16ウ、23ウ
巻八……二十一丁…3ウ、8オ、13ウ、17ウ
⑥ 巻九……三十六丁…7ウ、14オ、22オ、27オ、33オ
⑦ 巻十……三十三丁…7オ、9オ、15ウ、22ウ、30オ
⑧ 巻十一……三十八丁…6ウ・7オ、14オ、19オ、25オ、28オ、33オ、37オ
⑨ 巻十二……三十一丁…4オ、9ウ、17オ、24ウ、29ウ
⑩ 巻十三……三十九丁…6ウ・7オ、13オ、17ウ、26ウ・27オ、33オ、37オ、39オ
⑪ 巻十四の一…三十九丁…2オ、5オ、8オ、12オ、17オ、21オ、24オ、28ウ、35ウ
⑫ 巻十四の二…三十九丁…8ウ、11ウ、17ウ、20ウ、27オ、32オ、35ウ
⑬ 巻十五の一…三十四丁…3ウ、7オ、12ウ、15ウ、18ウ、23ウ・24オ、26オ、26ウ・27オ、33ウ
⑭ 巻十五の二…三十八丁…4ウ、13ウ、21オ、25ウ、34オ
⑮ 巻十六の一…三十丁……4オ、10オ、17オ、23オ、28オ
⑯ 巻十六の二…三十八丁…5オ、7ウ・8オ、8ウ・9オ、9ウ・10オ、10ウ・11オ、24オ、27オ
⑰ 巻十六の三…三十四丁…3オ、12ウ、18オ、21オ、24ウ・25オ

刊記　「寛文四甲辰歳冬十一月日／瓢水子松雲処士述」（第十六巻の三34丁オ。34丁ウは後表紙見返しに貼付。）
印記　「国立博物館図書之印」「徳川宗敬氏寄贈」「松本」（直径十

一ミリ円形朱印）

さて、内容的には巻一から巻五までが鎌倉将軍伝、巻六から巻十までが京都将軍伝、巻十一から巻十三までが織田信長伝、巻十四から十六までが豊臣秀吉伝に相当する構成になっている。これは林羅山の『将軍家譜』（明暦四刊、七巻）の鎌倉将軍家譜一巻、京都将軍家譜二巻、織田信長譜一巻、豊臣秀吉譜三巻に対応する。先述の書籍目録の言う如く、了意の仕事ぶりとしては、羅山の『将軍家譜』を机上に置いて独自に文飾を加えながら「和語ニ改」める作業であったと言えよう。しかし、その作業は勿論、幕命による武家政権の系譜の撰修、進覧を意図した書とは自ずから異なる。読者の側から言えば、平易な文体とふんだんに使用された挿絵、精彩を放つ武将たちの描写が読み物風史書として享受されたと考えられる。

また、この構成のなかで特徴的なのは豊臣秀吉伝の部の扱いである。内題、柱刻の巻数に示される通り、織田信長伝までは一から十三まで通し巻数が付されるのであるが、豊臣秀吉伝にいたり、上（一、二）・中（一、二）・下（一、二、三）に変わる。統一なき印象を受けるが、これもすでに豊臣秀吉譜に上中下とあるに従った結果ではある。しかし結果的に、この豊臣秀吉伝三巻七冊は分離しやすい状態に置かれたことになり、実際に宝永四年には『将軍記』から切り離されて独自に版を重ねて流布していくことになる。現在でもこの部分のみの伝本が確認せられるのはこうした事情であろう。

次に、他の無署名寛文四年版との違いについて略述しておく。

まず第一に、刊記から「瓢水子松雲処士述」が削られたこと（図版①②）。第二に、各巻内題のほぼ全てを入木訂正したこと。第三に、挿絵を含めて内容削減の傾向があることが指摘できる。これらの点はもとより今後の課題であり、問題の提起に留まらざるをえないが、若干の見通しを申し述べておきたい。

第一の点については、万治から寛文前半にかけての了意刊行書目に署名を欠くものが多いのも事実であり、気に留める必要もないのかもしれない。しかし、一旦署名入りで刊行しながら以後それを削除したのはなぜだろうか。周知の如く翻訳・翻案は了意のよく為すところであり、羅山著作の利用も多い。それでも、幕命による編纂である『将軍家譜』の直截的な和訳改作に、林家への憚りがあったということなのだろうか。あるいはこの点、了意側の事情のみでなく、書肆側の動向をも勘案する必要があるだろう。『将軍記』の版元はどこだったのだろうか。残念ながら署名版、無署名版ともに書肆名の記載はない。手掛かりを以後の版に求めるならば、後述する如く、宝永四年（一七〇七）版は京・荒川三郎兵衛の板行にかかる。がしかし、それ以前に元禄九年（一六九六）刊の『増益書籍目録大全』に「荒川三郎　将軍記　松雲誌　十八匁」とあり、この時点で既に『将軍記』板木は同人の元にあったと思われる。さらに『近世

書林版元総覧』によれば荒川三郎兵衛には寛文四年版『信長将軍記』の板行がある（未見）。これは無署名版『将軍記』の一部の可能性が高く、とすれば、『将軍記』開板当初から荒川三郎兵衛が関与した蓋然性が強まるのであるが、今暫く事実の確認が必要である。これに対し、では『将軍記』が依拠した明暦四年版『将軍家譜』の版元はどこか。知見の及んだかぎりでは、京・荒川四郎左衛門板と京・山口市郎兵衛板の二種が確認できるが、後者は書肆名を入木した求版本である。荒川三郎兵衛と同四郎左衛門、名前の類似からこの二書肆に関係ありとするのは速断に過ぎようか。しかし、『将軍家譜』と『将軍記』の密接な関係を思う時、書肆同士の関係・動向を視野に入れる必要は否定できまい。さらに附言すれば、書肆の荒川と言えば、林家の姻族にして『羅山林先生集』（寛文二刊）をはじめとし寛文期の林家関連書物の刊行を手がけた京・荒川宗長[4]が想起されるが、先の両人との関係はあるのか否か。ともあれ『将軍記』は、こうした書肆の動向の中での了意の仕事であった。そしてその過程で了意の名は削除されたことになる。今はこれ以上の材料もなく推測に終始したが、林家、荒川等の出版書肆、それと了意との関係を明確にしながら今後の解明に期したいと思う。

第二、第三の点は内容に関わる差異である。既に示したように、当初その内題は「本朝将軍記」でほぼ全巻統一されていた。これが無署名版では内容をより明確に分別する形で「鎌倉将軍記」「京都将軍記」「織田信長記」「豊臣秀吉記」と入木訂正を施されたのである。削除の傾向については、一例を示すと、巻十六の二「豊臣秀吉伝下之二」では挿絵を含め約六丁分が削除されている。朝鮮陣に際し、九州名護屋に長在陣の秀吉以下諸将による仮装余興の場面である。秀吉が瓜売り、前田利家が高野聖、蒲生氏郷は荷い茶売り等等に扮し卑しくも面白可笑しい所作の描写が続き、その滑稽な姿を描いた挿絵は読者の視覚に訴えて効果的である。この中で大権現家康は葦売りとなって尻からげに鉢巻き姿で売声を響かせる姿に描かれている。その故をもっての削除であったのか、それとも単に書肆の営業上の理由であるのか、他の異同箇所を精査した上で判断したい。

下って五年後の寛文九年版は、西尾市立岩瀬文庫の一本（七六／一六）であるが、しかし実際には、同本は寛文四年無署名版全十七冊中の十四冊までと一致し、その十四冊目である「豊臣秀吉記中之二」の巻の後表紙見返しに、「寛文巳酉仲秋之望／鼎鎮圓應書于坤室之南軒」と奥付式に別種の刊記を貼付したものである。実際の刊年を示すものではないと思われる（図版③）。

最後に、宝永四年版は「宝永四丁亥歳九月吉日／書林荒川三郎兵衛版」の刊記を有し、先に触れた如く、初めて書肆名を記す（図版④）。荒川三郎兵衛は、これとは別に、全く同刊記でありながら豊臣秀吉伝の部のみの七冊で、各冊に目録二丁を増補し、柱を「諸国軍記」と彫り変え板行に及んでもいる。また、宝永四年版に先立つ

版と推測されるが、刊年を欠き、宝永四年版刊記と同書体で「書林荒川三郎兵衛版」とのみ記す版本も存する（図版⑤）。

以上、底本と諸本との関係を概観したが、未だ不明点は多い。出版事情を含めて、『将軍家譜』と『将軍記』との関係、さらに『将軍記』了意署名版と無署名版との差異を明確にしていく作業を通じて、これらの問題を解決していきたいと思う。

［注］

（1）市古夏生氏「『伽婢子』における場の設定」（国文白百合14、昭和58・3）

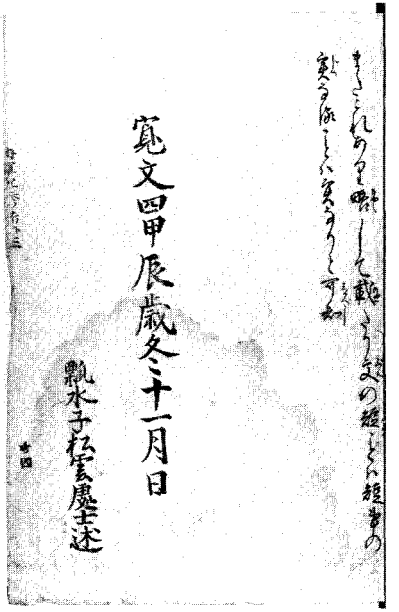
（2）檜谷昭彦氏「『太閤記』における「歴史」と「文芸」」参照。（新日本古典文学大系『太閤記』解説、平8・3岩波書店）

（3）江本裕氏「寛永－貞享期の文学－小説を中心に」（『日本文学史を読むⅣ近世』所収、平4・1有精堂）

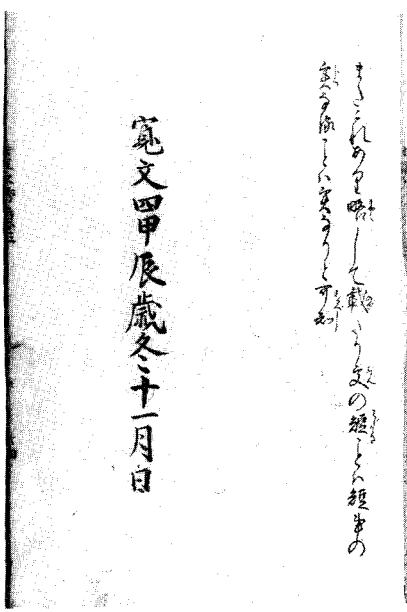
（4）『羅山林先生集』の林鵞峰跋文参照。

［付記］本稿をなすにあたり、翻刻および挿絵の影印の御許可を下さいました東京国立博物館、ならびに資料の閲覧複写を許可された各図書館に深謝申し上げます。また、檜谷昭彦先生、江本裕先生にはさまざまな御示教を賜りました。重ねて厚く御礼申し上げます。

［図版］（縮尺率は異なる）

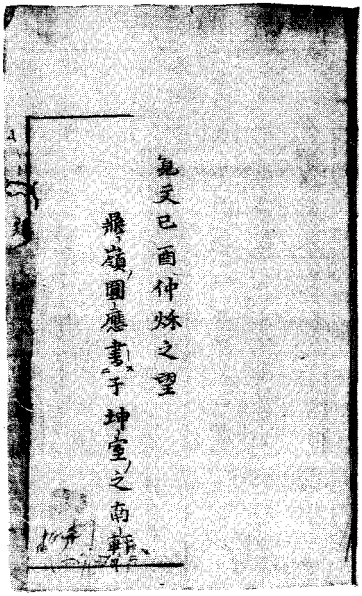


① 寛文４年版
東京国立博物館蔵本刊記

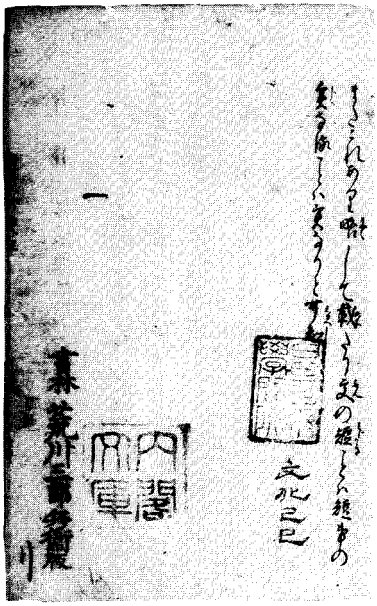


② 寛文４年版
内閣文庫蔵本刊記

④　宝永4年版
内閣文庫蔵本刊記



③　寛文9年版
岩瀬文庫蔵本刊記



⑤　刊年なし・荒川三郎兵衛版
内閣文庫蔵本刊記

凡例

一　東京国立博物館所蔵『将軍記』（全十七冊）のうち、「豊臣秀吉伝」上之一、上之二の翻刻を掲載した。

一　翻刻にあたっては、できるだけ原本に忠実になるように努めた。

一　仮名遣い・振り仮名・送り仮名・反復記号は原本通りとした。

一　清濁は原本通りとした。

一　原本には句読点は使用されていないが、読解の便を考え、私に句読点を付した。

一　漢字は原則として現在通行の字体に改めた。但し、異体字のうち当時の慣用に従って残したものもある。

一　誤字・当て字および誤刻と思われるものも原本通りとし、当該箇所に（ママ）と注記した。

一　改行箇所はすべて原本通りとし、特に行頭の一字を空けることは行わなかった。

一　各丁表・裏末尾に「」印を付し、（　）内に丁付を記した。

一、挿絵は、「　」内に巻毎の通し番号・挿入箇所の丁付および表・裏を記し、できるだけその近くに掲載した。

一　上之二の内題が原本には記されていないため、便宜的に括弧内に、（本朝将軍記上之二）と補った。

翻刻

本朝将軍記上之一

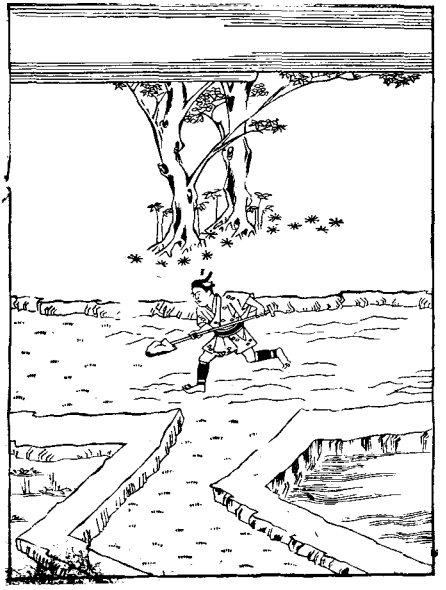
豊臣秀吉

豊臣氏秀吉は、その生所慥ならず。或人いはく、尾張国愛智郡中村郷の住人筑阿弥といふ人の子なり。その母、夢に日輪あまくだりて懐の中に入給ふと見て、これを生。此故に童名を日吉丸と号す。幼なきより智恵かしこく、長なるにしたがひて才覚利根なる事、世の常ならず。父母、すなはち禅僧になさんとて、同国の内光明寺につかはして弟子となす。時にその年八歳なり。しかれども更に経論祖録をば学文せず、只武勇をのみこのんで、常に心に思ひけるは、僧法師は乞食の類」（1オ）なり、いかでかかゝるものとなるべきと。それより万を雅意にふるまひ、態寺僧ともに飽うとまるゝ行をなしけるほどに、諫れども戒れども耳に聞いれず。僧衆厭果て、これ寺中の障碍わざはひの本となるべし。只親里に追かへせとて父のもとにをくる。日吉丸、父の戒めん事を思ひ怒罵ていはく、われ必らず汝らをころし、此寺を焼ほろぼさんといふ。寺僧等、後のことをかへりみて帷子扇をあたへ心をとりてかへす。本より父母の家まづしければ、日吉丸、或は田を耕草をとり、或は水を堰魚をと

りてやしなひの助をいとなむ。」（1ウ）

〔挿絵第一図（2オ）〕

十六歳の時、遠江におもむき松下加兵衛尉之綱に奉公して才覚あり。二十歳ばかりのころにいたつて、ある日之綱問けるは、尾張国にはいか様なる冑甲をか用ると。こたへていはく、胴丸といふ物あり。その製は桶皮筒にはかはりて、右の脇にてこれを結ふ。伸屈自由にして働やすし。此故に尾張には胴丸を用ゆと。之綱、金子五六両を出して、汝その胴丸を買もとめて来れと。日吉心に思はく、たとひこの金子をもつて之綱に返さずとも、何ほどの事かあるべき。これをもつて身をかざり、大身の主君につかへ身上をとりあげなば、是ほどの金子を之綱には返しあたへざらんやと。すなはち叔父がもとに行て此事を」（2ウ）談合す。叔父も心さしの大なる事を感じ、織田信長は今の世には良主君なり。汝行て奉公せよといふ。やがてかの金子をもつて小袖刀脇指をこしらへ、みづから木下藤吉郎秀吉と名のる。これは、古しへ朝比名義秀に武勇のほまれありといふ故に、義秀を打返して秀吉と名をつかれたり。義と吉とおなじくよしとよむ也。



挿絵第一図

永禄元年九月朔日、織田信長公、その比は清洲の城にをはしましけるが、木を植させんとてもとめありきて、かへり給ふ道のかたはらに、藤吉郎、跪て直に申上らるゝは、それがしか父は織田大和守殿に奉公仕たりしか、家まづしければ身上衰、足更に君の門内を踏事かなはず。」（3オ）只ねがはくは、めしかゝへ給ひて御蔭を仰奉りたきと申す。信長聞しめし、打わらひてのたまはく、汝が顔は猿に似たり。心もさだめて軽きものならんとてめしつかはせ給ふ。筑阿弥が子なればとて、小筑と名づけ給へり。ある時、同国犬山の城の近辺焼働のため、信長公未明に打出給ふ所に、馬にのりて意気勇たる者あり。信長、誰ぞと問給へば、木下藤吉郎秀吉とそ名のられける。又其後、信長公、暁がた鷹野に出給ふに、誰かあると仰せけるに、藤吉郎これに候とこたへ申さる。信長公、大に感じ給ひ、藤吉郎が奉公の勤をこたりなきものかな。用に立べき気象もの也とて、これより漸〻、信長公御前ちかく、直に御用をうけたまはる。」

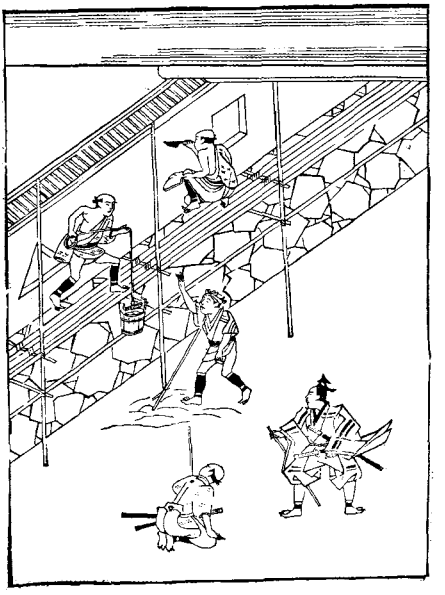
（3ウ）

あるとき、清洲の城郭の壁百間ばかり崩たり。信長公、大名小名におほせて塀を修理せしめらるゝに、廿余日になれども出来せず。藤吉郎つぶやきていはく、今東に今川義元、武田信玄あり。北に朝倉義景、斎藤龍興あり。西に佐々木承禎、浅井備前守長政あり。これまことに、石垣を高くし堀を深くして要害よくまもるべき時節なるに、城の壁の崩たるを修理にをこたりて日を重ぬる事は、禍をまねくにあらずやと。信長公聞ての給はく、なんぢ何をかいふや。秀吉更に申されず。信長公、秀吉の手をねぢ屈て問たまふ。秀吉、つまびらかにその心を」（4オ）申あげらる。信長公、大に感じたまひ、さらば汝奉行して急に修理せよと。藤吉郎、まづ家老の所にゆきていはく、城壁修理の事、下奉行のをこたりによつてをそなはれり。此ゆへに、それがしに奉行せよとの上意なり。そのよし下代どもに申つけてたまはらんとあり。家老衆、御辺よきやうにたのみ入と申されしかば、藤吉郎、百間の塀を十与にして割つけて下ぶぎやうにあひ渡されしかば、次の日出来せり。信長公、鷹野のかへりに見たまひて御感浅からず。その夜めしいだされ、御扶持加増ありけり。」

（4ウ）

〔挿絵第二図（5オ）〕

藤吉郎、信長公へ申上らるゝは、清洲の城は水に乏ければ、願は小牧山に城をかまへてしかるべしと。信長公も内々かくおぼしけれ共、諸人の費をいたみて打過給ふ。然るを、諸人の痛をかへりみず直に申あぐる事、下として上をはからふ。その罪おもし、死べきにあたれども、今は宥をく也との給ふ。をよそ主君のため諫を申す事、たび〳〵也。信長公、しば〳〵これをいましめ叱り給へども、露ばかりも恨むる思ひなく、只忠節をつくさんとのみ思へり。諸人、皆そしりわらひ、面の皮の厚は十重の鉄甲にもまさらんと、目ひき鼻ひきわらひけれども、それをも心にかけざりき。昔、漢の汲黯が直諫をこのみて、数々」（5ウ）王の顔色を犯すといへるに似たり。柴田修理亮勝家、丹羽五郎左衛門長秀は、信長公股肱の臣下也。秀吉これをうらやみて、その姓の一字を摘みとりて、羽柴と姓をあら



挿絵第二図

ためらる。

永禄六年の夏、信長公川狩し給ふ。これ武辺稽古のため、兵を両方に分て戦の真似をせさせて見給ふ。戯に羽柴藤吉郎秀吉を一方の大将とし給ふに、軍謀かけ引の賦、をのづから軍法の妙をあらはされしかは、信長公奇特の事に思ひ給へり。

同年の秋、信長公西美濃に働き、村里を焼はらひ、洲俣に陣とり給ふ。その夜、福富平左衛門、金龍の笄をうし」（6オ）なふ。諸人みなひでよしを疑がふ。秀吉、われ貧き故に此恥を負。されども、只今死すべき地にあらず、謀をもって盗人をとらへ恥を雪めんと思ひ、津嶋に行て富人をかたらひ、金龍の笄を質にをく者あらばしらせよ、金子十両をあたへんと云て、堀田孫右衛門が家にとゞまりてこれを待所に、盗人来てかの笄を質におきて銭五貫文を借といふ。秀吉はせ来り、これを捕牛頭天王の御宝前にまいり、悦申て盗人を信長公の陣に引すゆる。信長公帰らんとし給ふが、此よし秀吉申上らる。信長公、大に秀吉が心をあはれみ感じて、黄金を給はり、又百貫の領地をあたへ賜はりぬ。」（6ウ）

信長公、年中炭薪の費を問給ふ。奉行人申す、千石あまり也と。村井長門守に命て奉行を替らる。村井が挙る者はみな御心にかなはず。藤吉郎をめして奉行せしめらる。藤吉郎みづから火をたき炭を熾て勘がふるに、一月の費を一年になぞらへ見るに、前の千石あまりの三分一にして一年の炭薪足ぬべきむねを弁しり給ふ。信長大に感じて薪奉行に仰付らる。秀吉申さけれるは、他国の君はみな山には炭薪の運上、海には海の運上あり。今わが君の国には山おほく、村里には大木おほく茂れり。村〻より木一太つゝを奉らする時は、はなはだたやすかるべしと。信長大によろこび」（7オ）てのたまはく、汝よきやうにはからひ、百姓のいたみなきやうにすべしとなり。かくて後にのたまはく、汝をもつて炭薪の奉行にする事は、名馬に塩車ひかするがごとしとて、薪奉行をとゞめて別役を仰せ付られたり。

信長公、美濃にはつかうし給ふ所に、軍中にみなれぬ旗あり。誰ぞと尋給へば、木下藤吉郎秀吉が旗也と申す。信長大にいかって、それは誰ゆるしけるぞやとて、旗竿を切をりたまふ。しかれども秀吉、露ばかりもうらむる色なく、先登しんがり、進退その図にかなへり。」（7ウ）

〔挿絵第三図（8オ）〕

同九年、信長その家臣にかたり給はく、われ美濃国を退治せんとするに、敵人更におそれいたむことなし。却て味方の勇気たゆみ、軍兵疲てその詮なし。つら〳〵案するに、川の向ひに要害をかまへて軍勢をこめをき、策をつくし戦をいたし、一国を平かにうちしたがへばやと思ふはいかにとあり。をの〳〵うけ給はりて、此事尤しかるへしと申す。さて誰をか大将とすべきと。みな口を杜てもものいはず。信長公ひそかに秀吉をめして問給ふに、秀吉憚所なく申され

挿絵第三図

けるは、当国には夜討強盗を業とするものおほし。その中によき兵あり。篠木、柏井、科野、」（8ウ）秦川、小幡、守山、根上などにして、軍兵を尋しるし、これらを番手にして彼要害を守らせ給ふべきかと。信長、此事誠に然るべしとて、名字をしるし付て見給ふに、千二百余人に及べり。中にもすぐれたるものには、蜂須賀小六、同又十郎、稲田大炊助、青山新七、同小助、河口久助、長江半丞、加治田隼人、日比野六大夫、松原内匠など、これらを番頭上下五千人はかり也。これを二に分てしかるべし。若その大将なくは藤吉郎に仰せ付給へ。まかりむかひてもちしづめ申すべしと也。信長、大にその大器強気を感じたまひ、これをゆるされけり。七月、信長すでに奉行におほせて材木をあつめさせ」（9オ）られしに、九月にいたりて材木あつまる。これを筏にくませ、北方より渡りて川際にいたりてこれをつむに、山のごとし。かくて要害をかまへんとする所に、井口より後に岐阜と名づく軍兵八千余人を出してこれをふせぐ。信長の給はく、敵は大勢也、弓鉄炮をもつてよく防へし。敵をころすを本とすべからず。只要害のはやく出来するを詮にすべし。されば防くものは弓矢をすてず、城を普請するものは普請をゝこたることなかれとあり。日数いくばくならずして、城の要害残る所なく出来しければ、敵は興をさまして引しりぞく。すなはち秀吉を大将として人数をそへてこめをき、禁制條〻」（9ウ）を書出して軍兵にしめしさだめらる。そのゝち、敵またをしよせ、秀吉の軍兵ををびき出し付入せんとするけしきにて、弱〻と引とる。稲田大炊助見とがめていはく、敵の体たらく心あり。城中の軍兵一人も打出ることなかれ。秀吉も同心に制して、柵より外に一人も出されず。敵すでに案に相違して引しりぞく。稲田大炊助、蜂須賀小六、加治田隼人等、相議していはく、今夜をしよせて敵を夜討にせんと。かくて、日比より賂をあたへをきし敵方のものをよびよせ、敵の事共を尋ぬるに、今日の軍に労て今夜みな寝入べし。よき時節也といふ。秀吉」（10オ）等、みな城を出て敵陣をうかがひ、蜂須賀、加治田を少将とし、稲田を弓鉄炮の大将とし、ひそかに入て敵をころし、首十三級をとりて帰る。秀吉、すなはち書を清洲につかはす。信長大によろこび給

ふて、秀吉に御持鑓持筒を給はり、并に旗をゆるされ、蜂須賀、稲田、加治田等、をの〳〵勧賞あり。

大沢次郎左衛門といふものは、美濃宇留馬城主として、しかも大剛の兵なりけるを、秀吉さま〳〵かたらひ、策をめぐらして信長に属せしめ、清洲の城につれまいりて信長に対面せしむる。その夜信長、ひそかに秀吉をめしてのたまはく、大沢は大剛武勇のもの也。今より後に又心を」（10ウ）変じて敵になる事あるべし。只首を刎られんとあり。秀吉諫ていはく、大沢は強敵の張本也。尤誅すべしといへども、若これをころし給はゞ、誰か重ねて味方にまいるべき。只なだめをかれてしかるべきかと。信長更にゆるし給はず。秀吉家に帰り、刀脇指をもさゝず、大沢にむかひていはく、我汝を疑心あり。汝我を人質にとりて今夜すみやかに逃去べしとなり。大沢心得たりといふて、刀を秀吉の喉にさしあて、世の常の人質のごとく胸ぐらをとらへ、秀吉を打つれてその夜逃去ぬ。大沢が振舞未練也と、人みな笑あへり。

公方義昭、六条の城より二條の城にうつり給ふ。信長」（11オ）御いとま申て国に帰り給ふ。義昭のたまはく、武勇の侍一人をとゞめて城を守護せしめられよとあり。諸人みなおもふには、佐久間信盛が、柴田勝家か、丹羽長秀か、このほかはあるべからずとおもふところに、木下秀吉をとゞめて二條の城をまもらしめらる。諸傍輩みな案に相違して誹人もおほかりき。次の日、秀吉二条の城にいたり、上野中務少輔清信をもつて義昭へ御礼申すべきよし望まれしかば、義昭出て対面あり。これより秀吉の威勢つよくなりけるを、嫉輩おほく信長に讒言する事たび〳〵也。けれども信長更に聞入給はず。」（11ウ）

〔挿絵第四図（12オ）〕

同十一年四月、信長すでに近江国箕作城をせめられし時、秀吉先登してつゐに城をせめおとす。その事は信長の伝にあり

元亀元年の夏、浅井備前守長政、朝倉義景、力をあはせて信長と敵対す。信長みづからおもむきてこれをせめらる。秀吉先陣を望申す。信長ゆるし給ふ。美濃国の住人竹中半兵衛尉重治、牧村氏、丸

挿絵第四図

毛氏、三人を相そへて前陣たらしむ。

天正元年、信長すでに浅井朝倉を打ほろぼし、浅井が領地を秀吉に賜はる。秀吉すなはち小谷の城にうつり住す。しかれども、小谷は雪深き所なれば、往来の」（12ウ）なやみあるをもつて、同二年春のころ今浜に城をかまへて、長浜と名をあらためて小谷よりうつりて住給ふ。その外秀吉は、信長の仰せによりて城をせめおとし、領地をうばひとりし事、更にその数しらず。その事共はみな信長の伝にあり。

同五年十月、信長すなはち播磨国を秀吉に給はる。東播磨はことゞくしたがふ。小寺官兵衛も心ざしを秀吉に通ず。佐用氏、上月氏の一族ども更に服せず。秀吉これをせめらる。上月氏城はおちければ、山中鹿助を居て守らしむ。佐用城をせめらるゝに、小寺官兵衛さきがけしてつゐにせめおとす。城主兄弟を」（13オ）打とる。秀吉此よしを清洲に告申す。信長大に悦給ふ。官兵衛は後に入道して如水円清と号す。

同六年三月、秀吉すなはち信長の命をうけて、重ねて播州を伐給ふ。別所小三郎長治これにしたがふ。長治は播州東八郡の守護なり。時に長治が伯父別所山城守賀相といふもの、長治にかたりていはく、羽柴秀吉この国に来りて勢つよし。殃かならず我身にかゝりて、別所の一族ほろぼされん事うたがひなし。いかゞはせん。汝はわが甥なり、我をすつる事なかれといふ。長治これに一味して秀吉をそむきて三木城にたてごもり、要害をかまへて人数をあつめ、すなはち」（13ウ）評定していはく、此事はやく京都に聞えなば、軍兵はせくだりて急にせむべし。しからば城郭も要害そなはらず、兵糧もとともしかるべし。策をめぐらしてその間に城を堅固に用意すべき也とて、偽て書札を京都につかはし、反逆の企なき体をしめし、そのゝち長治諸城をかまへ、櫛橋左京進に志賀多の城を守らせ、神吉民部少輔は神吉の城、梶原平三兵衛は高砂の城、長井四郎左衛門は野口の城、淡川弾正は淡川の城、衣笠豊前守は波志谷の城を守る。長治及びその弟小八郎治定、彦進友行、山城守賀相、その外、上月、中村、高橋、服部、後藤、長谷川、神沢、大村、三枝、上原、魚住、賀古、」（14オ）飯尾、藤田等のともがらは、みな三木城にこもる。羽柴秀吉このよしを聞ていはく、われ長治をもつて播州の案内者にとおもひしに、反逆をくはたつることはいかにぞや。されども又おそるゝにたらずとて、別所孫右衛門重棟をよびて問ていはく、汝もまたそむく心あるやと。重棟涙を流してものいはず。秀吉のいはく、是さだめて山城守が所為ならん。汝すなはち書を長治につかはしてその心を察せよと。重棟使をつかはして再三いさむれども、長治つゐにしたがはず。秀吉、さらば三木の城をせめんとするに、軍兵おほからず。小寺官兵衛に問ていはく、いつれの所にか陣をとらんと。小寺がいはく、書」（14ウ）写山は僧坊おほく、兵糧ともしかるべからず。かの寺に陣とりて信長の加勢を待給へと。秀吉すなはち書

写山に入て陣とる。寺僧等おそれて逃かくるゝ。秀吉のたまはく、かの僧法師等に何の咎あるや。もし殺害せば曲事たるべしと。かくて野口の城をせめらるゝに、城主長井四郎左衛門、降人に出て城はおちたり。これよりさきに、長治と毛利輝元と同心す。爰にをひて、輝元より吉川駿河守元春、小早川左衛門佐隆景をつかはし、宇喜多直家が兵を合せて長治が加勢とす。その軍勢をよそ五、六万騎、上月の城をとり巻事、十重廿重也。城主山中鹿助、すなはち秀吉に加勢をこふ。秀吉すなはち小寺官」（15オ）兵衛等をつかはして高倉山に陣をとらしめらる。吉川元春、小早川隆景、多勢なるをもつて軍兵を二にわけ、一は城をせめ、一は秀吉と戦かはんとす。秀吉飛脚をたてて信長につけたり。信長すなはち嫡子信忠を大将として、佐久間右衛門尉信盛、瀧川左近将監一益をさしそへ、軍兵一万五千を率して加勢し給ふ。大将信忠すでに神吉城にとりかけてせめらる。城主神吉民部これをふせぐ所に、民部が一族神吉殿大夫、すでに大将民部が首を切て降人に出つゝ城をあけ渡す。こゝにいたりて信忠かへり給ふ。初め、信忠京を打出給ふ時に、父信長もをしつゞきて打立給はんとせしかども、羽柴秀」（15ウ）吉の武辺のほまれを猜ものども、信長をとゞめ奉り、これ秀吉を敵に追まくらせんとする為なり。ある日、毛利輝元が加勢の兵、野伏を出して秀吉の草刈をころす。秀吉の兵ども野伏を打ころす。こゝにをひて、毛利方より軍兵大に出て戦かふ。秀吉の兵尾藤、戸田、真先にすゝみて疵をかうふる。宮田氏、某は打死しけるほどに、秀吉の軍ひらきなびきてすでに敗北せんとす。竹中半兵衛重治、これをみて軍兵を引とる。此時信長の使者又来りて、秀吉早〻引退べしとあり。秀吉ちからなく書写山にかへる。山中鹿助大に力をおとして毛利方に降人に出けるを、つゐに誅しけり。秀吉すなはち」（16オ）信忠の家に行ていはく、後詰の援なき故に上月の城おちて鹿助ころされたり。これ公の過也と。信忠ふかく恥て、軍兵をあつめ三木の城をせめほさんとて、八月に城の辺におもむき、秀吉を平山に陣とらせ、信忠京に帰り給ふ。十月に、長治、賀相等、評定しけるは、敵の勢はわづかに三、四千、味方は七、八千也。此多勢にて小勢にとりかこまれん事は誠に口おしからずや。城を出て勝負を決せんといふ。諸人みなしかるべしと同ず。則軍兵を出して平畠といふ所に陣をとる。山城守賀相、小八郎治定大将たり。中村孫平次が城にとりかけて攻ける所に、秀吉後詰せらる。賀相、治定等、此よしを見て中村を打すてゝ秀吉にせめかゝる。」（16ウ）

〔挿絵第五図（17オ）〕

秀吉の先陣、備をみだしてあやうし。秀吉の弟羽柴美濃守秀長後に大和大納言と号す、大にたゝかふて賀相、治定が陣をやぶる。秀長をしつゞきてせめたゝかふ。敵軍の中に久米五郎久勝、志水弥四郎直近等、みなうたれて敵兵大に乱れしかば、山城守賀相は逸足の馬に策をうちて城中に逃こもる。治定は打死す。樋口大三郎その首をとる。長

挿絵第五図

治等は丹生山に城をかまへて、毛利家よりして兵糧をはこびいるゝ。秀吉急にせめられければ、兵糧を入る事かなはず、三木の城にとりいるゝ。そのゝち、毛利輝元、小早川隆景は三木の城をすくはんとて、数百艘の兵船を漕出して明石の魚住につく。秀吉これを聞て、三木と魚住」（17ウ）との道をとりきらんために、君が峰をとりかこみ、子城卅余ケ所をかまへ、塀をつけ堀をふかくして兵をいれて守らせらる。こゝにいたりて三木と魚住との通路、絶はてにけり。同七年の春、別所長治軍兵を出して秀吉の一子の城をせむる。此城には、古田吉左衛門、神子田半左衛門、中西弥五作、三人大将としてまもりふせぐ。古田は箭にあたりて死す。長治が兵もおほく打れ、又は疵をかうふりしかは、城に引返す。

三月、信忠大軍を率して重ねて播州にいたり給へば、秀吉の陣を三木の城下ちかき辺にうつさる。城中」（18オ）更に追はらふ事あたはず。

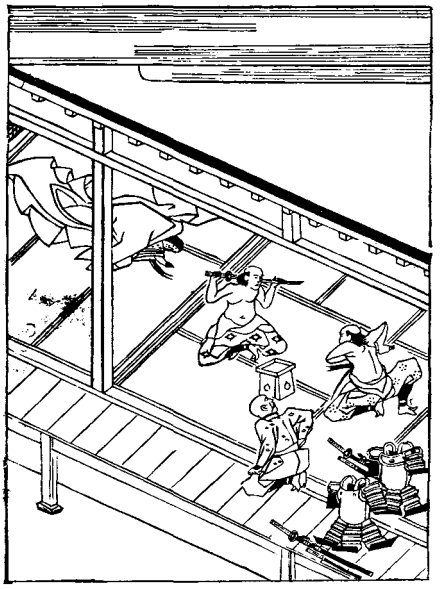
四月、信忠都に帰らる。秀吉の臣下竹中半兵衛重治は、武勇智略の名臣なりける。おもき病にかゝりて、医療術をつくせども効なし。京へのぼせて養性せさするに、微は験あるに似て大なる効なし。重治がいはく、軍陣の中に死するは武士の望む所也とて、播磨の平山の陣にかへり、六月につゐに死にけり。年いまだ三十六、秀吉大に歎き惜れたり。

九月、別所長治軍兵を出して、谷大膳衛好が守る所の陣にをしかけて、急にせめければ、衛好ふせぎたゝかふに力つきて打死す。秀吉此よし聞て、旗をすゝめてう」（18ウ）たんとす。別所山城守賀相、三千余騎にて大将の前に陣とる。秀吉、わつかに三百余人を魚鱗にそなへてかけ入つゝ、短兵急にとりひしぎ、突伏切たをし、四角八面に追まくる。山城守かけたてられてつゐに敗北し、打るゝもの六百余人也。これより城中大におそれて、あざむきがたく思へり。その上に、城中兵糧ともしく、糟糠をくらひ犬鶏をころし、馬を刺ころしてこれらをも喰つくし、後には死人の肉をあらそひわかちてくらひけるほどに、餓死するもの数をしらず。秀吉の軍兵はいよ〳〵気にのり、城中の兵は日にしたがふて弱をとろふ。」（19オ）

同八年正月、秀吉、秀長すでに三木の城をせめらるゝに、城中の兵、毎日にうたるゝものおほし。日数経て、長治、その弟彦進友行をよびていはく、此城すでに兵糧ともしく、軍兵疲れ、ふせぎたゝかふに力をとろへ、城のあやうき事、繊のごとし。久しく有事かなふべからず。今夜われ自害して、城中に残れる軍兵どもの命をたすけばやとおもふはいかに。しからばまづ、寄手のかたへ此由つげて、その返事によりて相はからはんといふ。友行すなはち書をしたゝめて、浅野弥兵衛長政につかはしていはく、天運すでに逼り、長治、賀相、友行等、自害せんとす。城中に残り」（19ウ）ける軍兵以下、これらを殺されなば不仁無慈悲のいたりなるべし。もしあはれみて助けられば、我らの喜びこれにすぐへからずとなり。浅野弥兵衛此よし申すに、秀吉うけがひて酒肴を城中にをくりつかはさる。長治大によろこびて、上下の軍兵等残らずめしよせ最期の酒宴をいたし、十七日の早天に、長治出て垢離をかき、香を焼て、彦進友行を使として山城守賀相にいはせけるは、城中兵糧つきて軍兵疲たり。我ら死してかれらをたすけんとおもふ。只今自害すべし。おなじ道にともなひ申さん。かならずをくれ給ふなよとあり。賀相がいはく、我が輩むなしくなりて、」（20オ）軍兵どもの死さらんには益もなき事也。城中の軍兵とおなじく死すべしといふ。城中上下の兵どもみないかりていはく、賀相いつはりをかまふ。たのもしけなき人にむかつて誰か命をすつへきとて、賀相をころさんとす。賀相櫓にのぼりて、火をかけて城を焼くづさんとす。家人等をしつめて賀相をさしころす。かくて長治、まづ妻子をさしころし、わが身もみづから首かきおとして死す。年廿三。彦進友行も自害す。年廿一なり。三宅肥前治忠入道は、長治が旧好の家老なり。おなじく自害す。秀吉、その首をとりてみな信長にをくり奉りてより、播州平かにおさまり、秀吉則三木の城にうつり居せらる。」（20ウ）

〔挿絵第六図（21オ）〕

月日いくばくならずして、家人数千間城下に立つゝけて軒をあらそふ。誠に政徳仁慈のしるし也と、人みな驚き感じけり。これよりして、但馬、備前、美濃、みな付したがふ。其外、西国四国の人民い



挿絵第六図

つれも秀吉の風を望まずといふことなし。

小寺官兵衛すでに秀吉にかたりていはく、三木の城は播州にてはかたはらなれば、それがし居住の姫路こそ一国の中央にして、しかも四国九州より京都まで、船の通路も心のまゝなれば、播磨を領せんともがらは姫路に過たる住所あるべからずと申す。秀吉すなはち姫路にうつり、しばしありて但馬におもむき、舎弟」（21ウ）美濃守秀長を国主として居をかる。

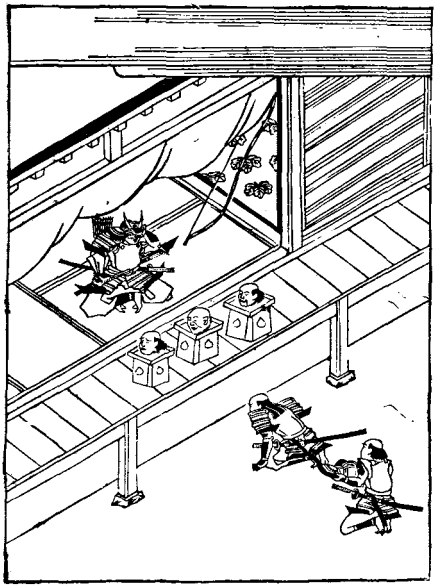
西播磨広瀬といふ所に、宇野氏某といふもの城をかまへて楯こもりけり。秀吉これをせむる事はなはだ急なり。宇野ひそかに城を出て、西国に落くだらんとす。荒木平大夫追かけてこれを打とる。

同九年の春、秀吉姫路の城を作らる。六月廿五日、秀吉大軍を率して因幡の国におもむき、鳥取の城をせめらる。城には山名豊国（後に入道して、禅高と号す）吉川式部少輔隆久、森下出羽入道道与、中村対馬守春次がこもりて守る所也（吉川森下中村は、毛利か家人なり）山名豊国すなはち秀吉に内通して城を出つゝ寄手に加る。吉川、森下、中村いよ／＼固く守り防ぐ。秀吉、附城をかまへ陣をつらね、日夜にこ」（22オ）れをせむる。毛利輝元、加勢をつかはし後詰をいたさんとするに、兎角して果さず。城中はなはだくるしみて、又兵糧ともしくなり、牛馬死人等を食て、餓死するもの城にみつ。命あるともがらも、手足なえよろめき倒て、弓をひき太刀をにぎるに力なし。こゝにをひて、吉川、森下、中村評義していはく、今この急難をのがれんとするに、落行べき道なし。網にかゝれる魚のごとし。毛利輝元、加勢後詰の約束をたがへられ、我ら死すべきに極まれりとて、福光小三郎をつかはして浅野弥兵衛長政にいひをくりけるやう、城すでにあやうく、攻おとされん事近し。」（22ウ）大将三人自害すべし。ねがはくは、残れる城中の者どもの命をたすけられば、三大将の喜びならんと。秀吉聞てその契約をなし、酒肴食物を城中にをくらる。吉川、森下、中村大によろこび、城中上下の軍兵共めしあつめ、いとまごひし、酒宴をなしてのち、自害の時剋を秀吉につげしらせたり。秀吉すなはち堀尾茂助吉晴を検使につかはす。吉川、森下、中村は城を出て寺にいたり、堀尾に対面して礼義をいたし、をの／＼腹切けり。堀尾すなはち三人の首をとりて立帰らんとす。福光小三郎、坂田孫次郎二人すゝみ出ていはく、我ら日ころ吉川が恩をうけて、」（23オ）今に報ずることなし。おなじく死してこれを報ぜんとて、二人さしちがへて死す。秀吉は此三大将の首を見て、涙を流して義のふかきことを感じ、やがて城中の軍兵どもを出して粥を煮て食せしむ。日ころ久しく食に飢たる故に、俄におほく食ける者はみな死けり。すくなく食けるものは、命恙なく漸々に気力本復したり。其後五万石を宮部善祥坊にさしそへて、城代として守らしむ。又伯耆国羽衣石城は、南条勘兵衛これを守り、岩倉城には小鴨左衛門尉をこめてまもらしめらる。

十月、吉川駿河守元春、軍兵を率してこれをせ」（23ウ）

〔挿絵第七図（24オ）〕

むる。秀吉すなはち宮部善祥坊にかたりていはく、今鳥取の城をせめおとす軍兵ども、さだめて大に疲ぬへし。しかれとも、羽衣石、岩倉を攻おとされなば、敵の勢つよくなるべし。我はなはだうれへおそるゝ也と。善祥坊がいはく、加勢後詰をいたしてすくふにはしかじと。秀吉すなはち増田仁右衛門をつかはして、軍中の事をはからはしめ、秀吉すでに伯耆におもむき、鎧畠といふ所に陣をとらる。吉川元春引しりぞきて鳥山に陣どる。秀吉、近辺の村里を焼はらひて兵糧米をうばひあつめて、羽衣石、岩倉の両城に入られ、かならず南条小鴨慎て城をよく守るべし。敵たとひちかく攻よせて



挿絵第七図

挑といふ共、」（24ウ）城を出てたゝかふ事なかれと仰せ付られ、秀吉は十一月に播磨の姫路に帰らる。

信長すでに秀吉及び池田勝九郎之助をもつて、淡路の国安宅木河内守がこもりし由良の城をうたしめ給ふ。安宅木すでに城をかこまれ、力をとろへて降人に出たり。池田之助これをめしつれ、江州安土にいたりて信長に対面せしむ。秀吉はすくに姫路に帰らる。

十二月、秀吉歳暮のの御礼のため、姫路を立て安土におもむき、菅屋九右衛門、堀久太郎をもつて申入らる。信長大によろこび、菅屋、堀をつかはして秀吉にいはしめ」（25オ）給ふ。今年諸所の軍陣に苦労いふはかりなし。今はそのかみの藤吉郎にはあらず。国持の大名なり。明日御振舞給はるべしと也。秀吉大に謝し申て安土の城にのぼられしかば、信長立出て対面あり。心地よげにおはしぬ。秀吉平伏してまかり出つゝ、微明に登城あり。国久の太刀一腰、銀千枚、呉服百、鞍蓋の馬十疋、播磨杉原三百束、滑革二百枚、明石干鯛千箇、野里の鋳物色〳〵、蜘蛸三千連を奉らる。山上より山下にいたるまで、山に山をつみあげたり。信長、殿主よりこれを見給ひての給はく、大膽大器者、羽柴筑前守が持参の物なりとて、諸人に見せしむ。人みなおどろき」（25ウ）ていはく、おびたゝしき事いまた更に見たるためしなし。堆物かなといへり。信長のたまはく、我もつゐに、かくのごとく大なるさゝげ物はみず。羽柴は天下無双の大膽もの也。たとひ支那身毒をうたしむとも否とは辞退せじとの給

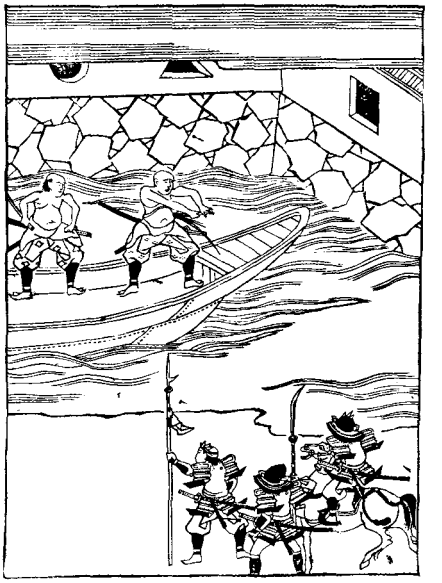
ふ。信長いとゞ快おはせしかば、近習みなよろこぶ。かくて信長出て秀吉にまみえ給ひ、厚もてなして御茶を賜ふ。丹羽五郎左衛門、長谷川丹波守、医師道三相伴とす。其後さま〳〵御物がたりおはして、帰国の御いとま給はるに、国次の脇指を下さる。これは備前守信秀の遺物なり。堀久太郎持て秀吉の家にいたる。秀吉頂戴あり。」（26オ）

同十年三月、秀吉軍兵を率して備中国にいたり、冠城をせめおとす。それより河屋城にとりかけてせめんとするに、戦かはざる以前に降参す。猶すゝみて高松城をせめらる。要害険阻の名城にて輒責がたし。城主清水長左衛門尉は聞ゆる名将也。毛利輝元が股肱の家臣也。輝元すなはち難波伝兵衛、近松左衛門に軍兵二千をさしそへて加勢しければ、城中大につよりて落べき色なし。秀吉すなはち城のありさまを見て、これ水攻にまさる事有べからずとて、城のめぐり三里の間に堤をつき、大河谷水を堰入しかば、日を重ぬるにしたがひて水漫〻と湛へて大海の」（26ウ）ごとし。堤にそふて附城を所〻にかまへ、夜まはり昼番をこたらず、五月に、小早川隆景、吉川元春五万余騎を率して釈迦峰不動嵩に陣をとる。そのゝち毛利輝元三万余騎にておなし峰に陣とる。城中大によろこぶ。しかれども河水湛えて城中に通路する事かなはず。秀吉、書を信長に奉りていはく、高松の城をせめほさん事、近にあり。然れども、輝元数万の軍兵を率して城中に加勢せらる。若軍兵をくだし給はらば、それに高松の城をとりまかせ、秀吉手の軍兵をもつて輝元を打なびかさば、西国は即時に平しづめんと申つかはしければ、信長さらば加勢を」（27オ）秀吉につかはさんとて、惟任日向守光秀、筒井順慶、長岡与一郎忠興、池田紀伊守信輝父子、中川瀬兵衛清秀、高山右近等をはじめとして、軍兵都合三万五千余騎をつかはして秀吉をたすけすくはる。毛利右馬頭輝元、すでに高松の城をすくはんとすれども、秀吉の策にをさへられてすゝむ事あたはず。その間に水いよ〳〵かさなりたゝえて、蛇、蚊、鼠等あつまり出て城中にみち〳〵たり。女、童はおそれまどひて、絶入事毎度也。水すでに城をひたすにいたりて、城主清水長左衛門、その兄月清入道にいふやう、かくのごとくならば、城中水に溺死なん事疑なし。我」（27ウ）ら自害して城中の軍兵をたすけんと思ふはいかにと。月清入道、我もかく思へりとて、難波、近松に問に、みなしかるへしといふ。六月三日、清水長左衛門、書をつかはして秀吉に申す。秀吉契約して酒肴を城中にをくらる。清水大によろこび、軍勢にいとまこひ、酒肴をひろめ、次の日小舟を乞て、清水兄弟、難波、近松これにのりて堤にむかふ。まづ城中の諸道具その所〻にかざり、書付を壁にをしていはく、我ら死して後、秀吉に渡すべしとて、舟にのりて城の門外に漕出し、水の上にして腹切て死す。秀吉その城を取、杉原七郎左衛門尉家次を居て守らしむ。」（28オ）

〔挿絵第八図（28ウ）〕

同月三日、長谷川宗仁がもとより、飛脚をもつて秀吉につかはしていはく、昨二日の朝、惟任日向守光秀が逆心によりて、信長、信忠御生害ありと也。秀吉聞て大におどろかれしかども、更にとり乱さず。次日、数百騎を率して陣や〳〵をめくり見給ふ。これよりさきに、毛利輝元和睦すべきむね申いれ、備中備後伯耆三ケ国を奉らんと起請文をもつて申つかはさる。今猶しきりに和睦せんと申さる。秀吉、まづ信長の御事に依てしばらく和ぼくせんとはかり給ふ。すでに吉川元春、小早川隆景が使者又来る。秀吉心に思ひ給はく、信長の御事隠すとも隠しとげし。」（29オ）つゐには隠あるまじ。只ありのまゝにかたらんと、その使者にかたり給はく、信長公は明智光秀がために御生害あり。それとても毛利和ぼくの約を変改あるまじきや。汝まづ帰りて、此よし輝元に問きたるべしと也。使者立かへりて申す。輝元すなはち吉川、小早川等を集て評議す。或は是非にまどひてものいはず、或は只軍兵を安芸に引入て時をうかがひ給へといふ。小早川隆景すゝみ出ていはく、信長の生害は秀吉の不幸也。されども、秀吉京にのぼり日向守光秀を打平げられは、その勢天下に満てこれをふせぐもの」（29ウ）有べからず。只今和ぼくの約を変改せば、秀吉の恨骨髄に徹せん。しからは毛利家の滅亡疑なし。されば秀吉は智略武勇の名将、大膽気情の強士なり。天下をとるべきは誰か此人の外にあらんや。今いよ〳〵和ぼくの親をなし、信長の死去を吊はれなば、秀吉の喜はかりなく、これ毛利家の繁昌ならんと申す。輝元これにしたがひ、内藤越前守広俊を使者として信長を吊せられ、又蜂須賀彦右衛門尉正勝をもつて秀吉に申さしむ。信長たとひ果給ふとも、和ぼくの事変改すべからず。輝元及び元春、隆景更に秀吉に遺恨なしとあり。秀吉大によろ」（30オ）こびていはく、我思はく、輝元若和ぼくの約束を変ぜば、宇喜多秀家をこゝにとゞめて、秀吉は京にのぼりて光秀をうたんと思ひける所に、毛利其約を変ずまじくはめでたき首途也とて、たがひに起請文とりかはし、鉄炮五百挺、弓百張、旗三十本を輝元に乞て、六日に高松を引はらひ、八日に姫路に帰る。

織田七兵衛信澄は、武蔵守信行の子也。信行は兄の信長にころされ



挿絵第八図

し故に、信澄これをうらみける事尤その根深し。しかも日向守光秀が婿なり。此時大坂にありしが、上洛して光秀に力を合せんとせられしを、信長の三男三七信孝、丹波五郎左衛門長秀相議して」（30ウ）大坂をせめられしかば、七兵衛信澄打まけて死せらる。

秀吉は、姫路を立て尼崎にいたり、髪を切つゝ使者を三七信孝、丹波長秀、池田信輝及びその子之助等につかはしていはく、我今主君の悪敵日向守光秀をうたんためにこれまて上りぬと。こゝにをひてみな尼崎に会合あり。池田信輝、入道して勝入と名づく。軍評定ありけるに、勝入高声にいはく、先陣は我なるべしと。高山右近すゝみ出ていはく、山崎の合戦は次第をもつていはゞ、先陣はそれがし、二陣は中川瀬兵衛、三陣は池田也と。秀吉いはく、信長公の時、軍立の定」（31オ）かくのごとし。今猶その法を守るべしとあり。これにより六軍の列さだまりて、山崎にをしすゝむ。高山は高槻の城主、中川は茨城の城主、池田は有岡、尾崎、花隈の三城をまもる。此故に、近所より遠所を漸々後陣にさだめし先例をもつて、高山かく申けり。

日向守光秀安土の城に行けるが、明智左馬助をのこして五畿内を静めんとて、八幡の近所に洞が峠といふ所にいたり、大和の筒井順慶をまねけども来らず。光秀うれへて、わか二男小阿古を人質につかはしけれども、順慶つゐに来らず。時に日向守光秀は、羽柴筑前守秀吉播磨の姫路を立て攻上ると聞て、軍陣の列をさたむ。」（31ウ）

山崎の先陣は斎藤内蔵助利三、柴田源左衛門二千余騎、江州の勢三千余騎を相副たり。山手の先備松田太郎左衛門、並河掃部二千余騎、右の方の備は伊勢与三郎、諏訪飛騨守、御牧三左衛門二千余騎、左の方の備は津田与三郎二千余騎、次に光秀五千余騎にて旗本の備をたてたり。羽柴秀吉の軍兵は、先陣は高山右近二千余騎、二陣は中川瀬兵衛尉清秀二千五百余騎、三陣は池田勝入父子五千余騎、四陣は丹羽五郎左衛門長秀三千よ騎、五陣は三七信孝四千よ騎、六陣は秀吉二万余騎にてすゝみけり。爰に斎藤内蔵助は洞峠にありて、使を日向守光秀につかはしていはく、秀吉大軍をもつて」（32オ）をし来る。只おなじくは今日の軍をとゞめて坂本の城にこもり給へかしといふ。光秀大にいかりていはく、主君をころす事は成がたきもの也。われ能これをなす。何ものか此勢に対すべき。汝心やすく思ひてはやく爰に来るべしと返事す。

十三日、光秀山崎に陣とり松田太郎左衛門をよびていはく、汝はやく天王山にのぼり、山崎を直下て弓鉄炮を敵陣へ打いれさせよと。松田七百余人を率してのぼる。羽柴秀吉は、堀久太郎秀政及び堀尾茂助吉晴をつかはして天王山にいたらしめらる。敵味方はしたなく出合て相せむる。秀政よく戦かふ。松田敗北して引のく。しか」（32ウ）るに先陣高山右近は、山崎の南門を閉かためて他の軍兵を通さず。光秀か先陣伊勢与三郎、諏訪飛騨守、御牧三左衛門、その弟勘兵衛と大に戦かふ。二陣中川瀬兵衛は坂をのぼりて左よりかゝり、

三陣池田勝入父子は川を渡して右よりかゝる。三陣にをしつゝまれて、光秀が江州の兵うらよりくづれて、伊勢、諏訪、御牧みな打死す。光秀はせむかふて加勢すべきといふ。比田帯刀これをとゞめていさめけるは、此軍味方大に乱れて大事にをよべり。まづ勝龍寺にこもり給ふが、今夜ひそかに坂本におもむくか、此両条分別あれといふ。光秀忙然として度にまよひ、勝龍寺はいづかたぞといふ。比田馬を引てこなたへとてすゝ」（33オ）む。敵軍はやその道をとりふさぐ。光秀わづかにのがれて閑道より勝龍寺に入たり。をよそ今日の合戦は、中河瀬兵衛清秀大功のはたらきをもつて、日向守光秀が軍兵一時に敗北せり。織田三七信孝、すなはち清秀が手をとらへて、汝のはたらきをもつて敵を切くづして勝軍したり。本意をとげし大功をいづれの時にかわすれんとありしに、羽柴秀吉、その後にありて輿にのりながらいはく、瀬兵衛〳〵骨をり〳〵と申されしを、清秀聞ていはく、筑前守がなめげなること葉、その容つきすでに天下をわが物に呑いれたる気ありといひけるこそ、誠によく当れるなれ。」（33ウ）

惟任日向守光秀、すでに勝龍寺に入てその軍兵を見れば、わづかに千人にたらず。日暮にいたりてこれをみれば、いづちへかおちうせけん、兵只百騎にだにも足ず。光秀これにては中〻かなふべからずとおもひ、夜に入て勝龍寺を出て、ひそかに伏見をさしておもむき、小栗栖にかゝりて坂本の城にゆかんとす。明智庄兵衛、進士作左衛門、村越三十郎、堀毛与次郎、山本仙入、三宅孫十郎、わづかに五、六騎打つれておちゆく所に、野伏ども蜂のごとくおこり、蟻のごとくあつまりて、藪の中より鎗をもつて突に光秀が右の脇をしたゝかに刺。それより三町ばかりにして馬より落たり。これはいかにといふ。光秀がいはく、さきに竹藪の中より出し野伏に」（34オ）突れて、腸出つゝかくのごとし。早くわが首を切てふかく蔵せよとて、息きれ、むなしくなる。明智庄兵衛その首をとりて馬鞦につゝみ、溝の中に蔵し、屍をも道のかたはらなる深田に埋みて、みなちり〳〵に落うせたり。明智左馬助は安土城にあり。秀吉せめ来ると聞て、我此城にありても益なし。光秀と一所に死なんとて山崎におもむく。堀久太郎秀政に引あふて、大津打出の浜にしてたゝかふ。左馬助敗北して坂本の城にこもる。されども軍兵みな落うせて、城をふせぐ力なし。こゝにをひて光秀が子に自然といひしを初めて子息三人、息女三人をさしころし、城に火をかけ我身ともに焼死す。」（34ウ）

十四日、秀吉三井寺にいたる。小栗栖の里人、惟任日向守光秀首をもちきたる。秀吉大によろこび、杖をもつてその首を打ていはく、君をころせし天罰はやく来りてかくのごとしやとの給ふ。

斎藤内蔵助も江州堅田に落行けるを、里人生どりて秀吉にまいらする。秀吉、また光秀が屍を尋もとめて、その首を続て粟田口に磔にかけ、内蔵助もおなじく磔にす。

秀吉舟にのりて長浜におもむく。これ秀吉の旧領なり。こゝに江州浅井郡山本に安土万五郎といふもの、光秀に心ざしを通ず。光秀すでに信長を弑と聞て、」（35オ）

〔挿絵第九図（35ウ）〕

わが手の凶賊を率して長浜の城をせめとりてこもり居る。光秀うたれたりと聞て、万五郎舟を塩津海津にふなよそひして敦賀に落ゆかんとす。里人追つめて首を切て秀吉に奉る。秀吉、二日逗留して尾張の清洲におもむく。丹羽五郎左衛門長秀、池田勝入も来る。瀧川左近将監一益は関東よりはせ来る。柴田修理亮勝家は、越中国にして長尾喜平次と対陣せしが、信長の事を聞て陣を引はらひ京都に責

挿絵第九図

のぼらんとせし所に、羽柴秀吉はや光秀を打たりければ、おなじく清洲にいたり、秀吉、長秀、勝入等と評議して、信忠信長の長男の息三法師を信長の世継とし、闕国をわかち領ず。」（36オ）信雄卿には信長の二男尾張国、信孝には美濃国、秀吉には丹波国、勝家には近江国長浜、池田父子には大坂、尼崎、兵庫、長秀には若狭国及び近江国高嶋、滋賀二郡、瀧川一益には五万石、蜂屋出羽守には三万石、これみな所領を加増せらるゝ所也。三法師殿を安土山にうつし、長谷川丹波守、前田玄以斎を御守につけ、近江国にて三十万石をもつて御厨料とす。三法師殿御幼稚の間、信雄卿を御名代とす。此時柴田勝家大にその心おごりて、物申すこと葉もいやしく、臀をまくり緩怠慮外おほかりけり。傍輩にむかひても猶かくのごとし。丹羽長秀ひそかに羽柴秀吉にささやきけるやう、公もし天下をしたがへんと思はゝ勝家を」（36ウ）斬べしと。秀吉わらひていはく、我何故に柴田に敵をなさんやと。その夜秀吉、夜もすがら寝ずして大息す。長秀あやしみて問にこたへていはく、われ江州の長浜を勝家にうばひとられし事を口おしく思ふなりと。かくてをの〳〵国に帰らんとす。勝家思はく、我をふさぐものは秀吉也と。すなはち軍兵を路にかくし秀吉をころさんとす。秀吉聞て、殊道より美濃長松を経て長浜にいたる。勝家は、越前にかへらんとして長浜をとをらん事をおそれて、美濃の垂井に逗留す。秀吉聞ていはく、我何故にかみだりに勝家を打べき。かならず心ををくことなかれとて、次丸秀勝

とて信長の末子也けるを、秀吉これを養ぎか」（37オ）れしを、人質に出さる。柴田、すなはち秀勝をつれて木本より越前に帰り給ふ。羽柴、柴田の不和確執のはじめなり。

十月三日、秀吉を従五位下に叙し、右近衛少将に任ず。秀吉、すなはち紫野の大徳寺にして信長公の葬礼をおこなはる。まづ一七日の法事を修せらる。鳥目一万貫、白米一千石を大徳寺にをくらる。杉原七郎左衛門家次、桑原次右衛門、副田甚兵衛これを奉行す。同月十一日、転読の経あり。十二日頓写施餓鬼、十三日懺法、十四日入室、十五日闍維、その有様目をおどろかす奇麗をつくせり。金紗金襴をもつて棺槨をつゝみ、金銀をもつて軒欄を」（37ウ）ちりばめ、沈香をもつて仏像をつくりて棺の内にをき、綾の白幕を四門にはり、近国の武士警固辻堅弓鑓鉄炮を立ならべ、路の両方につらなる事すでに一万余人也。羽柴小一郎秀長これを奉行す。前輿は池田古新輝政、後轅は次丸秀勝これを舁。信長公の八男長丸信吉は位牌をもつ。秀吉は不動国行の太刀をもち、すなはち太刀を大徳寺にをくる。闍維の後、秀吉、秀勝焼香す。秀吉執奏して一品相国を贈給ふ。五山の僧衆残らず出仕あり。大徳寺に一宇をたて、惣見院殿贈大相国一品泰厳大居士の廟所とす。銀子千枚をその経営とす。五千石を寺領とす。（次日鳥目千貫をもつて太刀代として太刀をかへす）」（38オ）

秀吉、すでに津の国の宝寺に城をつくらんとせられしに、つゐに成就せずして寝ぬ。

十一月、織田三七信孝は、美濃国岐阜の城にありて、日本をしたがへて天下のあるしとならんとおもふ心ざしあり。信雄卿をそむきて羽柴秀吉を打ほろぼさんとくはたてらる。秀吉聞つけて、軍兵をあつめ急に美濃の国におもむき、岐阜の城にとりかけて攻らる。信孝もとより柴田勝家と心を合せ内通あり。しかれども越前は雪ふかく降つみて、勝家さらに軍兵をもよほして出る事たやすからず。兎角する間に、信孝ふせぎまもる事かなはずして和平を乞れ、さま〳〵わびことありしかば、」（38ウ）秀吉さすが信孝をころす事をいたはしく思はれければ、和ぼくしてゆるしかへらる。」（39オ）

（本朝将軍記上之二）

柴田勝家は越前にありて、秀吉の権威はなはださかりに成ゆくよしを聞て、大いにねたみそねむ事骨髄にとをりければ、瀧川左近将監一益をよびてひそかに相議ていはく、羽柴秀吉すでに幼主君三法師殿を安土の城に居置、わか身は管領執権して威をふるひ、後に天下をうばひとらんとする。そのいきをひ外にあらはれ、をのれにしたがふものをば近づけとりたて、したがはざるものをば疎みしりそけて押たをさんとす。今もし誅せずは、天下のなかき禍となり、悔とも甲斐あるべからずとて、すなはち三七信孝に申て一味せしめ、ま

づ使を丹羽五郎左衛門長秀がもとにつかし」（1オ）はして此事をいはしむ。長秀が返事に、秀吉いま三法師殿をもりたて後見をせらる。信孝これをきらひおぼしめすならば、三法師殿を岐阜へむかへとり給ひて信孝御うしろみありて然るべし。されども三法師殿御幼稚の間は、さま／＼の口説は絶べからず。只よく御思案あるへしと申返しぬ。丹羽長秀常に思ふは、天下の事武勇をもつていはば、柴田、瀧川に誰か肩をならべん。しかるを武勇にほこりて仁義をしらず、主君をなゐがしろにす。これ羽柴筑前のかみ秀吉は、武にして文あり、よく主君に礼節をおこなふ。つゐには天下をとらんものなりと思へり。此故に今さだかなる返事をはいたさゞりし也。しかるに秀吉の威勢、い」（1ウ）よ／＼日をかさね、月をこゆるにしたがひてつよく成事、若草の生立がごとし。柴田勝家此よしをつたへ聞に、胸ふさがり腹もだえて歎息をつき、大雪のふり積るを見ても、拳をにぎり歯を切ていかりをふくみ、飛立ばかりに思ひなから、雪ふかければ軍をもよをす事もならで、只大雪をにくみ暮す。瀧川謀ていはく、北国のならひ、十一月より二月までは雪ふかくして軍用もよをしがたし。此内は勝家と秀吉と和ぼくをなして時を待給へかしといふ。柴田尤也といふて、怒をゝさへて使者をつかはす。小嶋若狭守、中村文荷斎をもつて、前田又左衛門利家、不破彦三、金森五郎八がもとにつかはしていはく、信長公の御事いまだ年をこ」（2オ）えざるに、勝家と秀吉と刃をとぎ鏃をあらそはゝ、人のあざけり世のそしりのがれかたかるべし。ねがはくは、心をあらためて秀吉ともろ友に三法師殿をとりたて申すべし。いそぎ京都にのぼりて此よしを秀吉にかたりて給はらばよろこび入べしと也。前田、不破、金森、すなはち北の庄を立て長浜にいたり、勝家が養子伊賀守勝豊にかくと語る。勝豊、すなはち三人ともろ友に長浜を出て摂津国宝寺にいたり、富田左近将監をもつて秀吉にかくと申入る。秀吉のたまはく、勝家は信長公の老臣なり。我いかでかその言にしたがはざらんやとて、すなはち勝豊、利家、不破、金森四人をめしてさま／＼もてなさる。四人いまはかへらんとして議していはく、秀吉の心ざし案に相違せり。さためて秀吉此和ぼくの事聞いれ給はじとこそ思ひしに、思ひの外にやはらぎ給へり。しかれども起請文なくしては益なしとて、又秀吉へ申入る。迚の事に堅き誓約を給はらん。秀吉のいはく、我もかく思ふ也。丹羽長秀、池田勝入等と談合してをの／＼しかるへしといはんときに誓言すべし。此おもむきを勝家にかたらるべしとなり。四人すなはち飛脚をもつて勝家に此赴いひつかはし、まつ信長の墓所にまうで日を経てのち、四人ながら北の庄に帰る。勝家、すなはち辛労を謝してのち、大によろ」（3オ）こびていはく、われ羽柴筑前守をあさむきすましたり。明年は時を待て運にまかすべしと申されき。秀吉は蜂須賀彦右衛門正勝、木村隼人にかたりていはく、此たび勝家和ぼくの事、みなこれ我をあざむくいつはり也。我をこたりて由断する所を、俄に来りて京をせめ

んため也。我よくこれをさとりしりぬ。勝家等が知慮をもつて我をいつはりあざむかん事、蟷螂か斧成へし。をろかなるはかりことかなとて大にあざわらひ給ふ。

秀吉は、洛ちかきともがら、畿内の諸大将の心をとらんがため、使者を諸方につかはして、心ざしふかく恩をあつくせられしかば、みな心さしを秀吉に通じ、いか成大事」（3ウ）有とも御用に立べしと、をの〳〵思ひ申けり。又勝家方にしたしむものをば、色をたてゝ疎みへだて、ひたすら敵也と思へるけしき也。

秀吉、軍兵を率して江州長浜におもむき、在家を焼はらふ。柴田伊賀守勝豊、長浜の城をまもる。秀吉思はく、勝豊は勝家が養子ながらも、勝家及ひ佐久間玄蕃允盛政と勝豊中あしき事久し。されば、長浜の城をせめおとさん事はいとやすし。しかれとも勝豊に降参せさせんにはしかし。すなはち勝家、勝豊の間意趣あるの子細條〻をしるして、勝豊が家老木下半右衛、大金藤八郎、徳永石見守をよびてつぶさに」（4オ）申聞せらるゝに、三人ながらみな尤也と同して、城に帰りて勝豊にかたる。勝豊も、日比勝家にうらみふかき故に、そのうらみ十七ケ條を書たてゝ家人共によみきせ、此条〻わが非あらは申せといはれしに、家中、一同にこれは君の御理也と申す。さらば面〻の心にまかせよとあり。家人等、あるひはそのまゝ勝豊に付したかふもあり、あるひは父母妻子の越前にあるものは越前にくたりてとゞまるもおほし。勝豊と勝家不会せし根元は、初、勝豊を養子にいたし、そのゝち勝家またわか甥佐久間玄馬允盛政に加賀二郡をあたへて、これをもてはやし寵愛する事勝豊にこえたり。盛政これにほこりて」（4ウ）いよ〳〵勝豊をかろしめあなどる。ゆえに勝豊大にねたみ腹だつ。元日祝義のとき一族みなあつまりしに、勝家が盃をまづ盛政にさす。勝豊大にいかりて盛政が袖を引とゝめ、勝豊すゝみ出て盃をとりてのむ。勝家、盛政いかにともすべきやうなし。これよりして勝豊すてに勝家をうらみ、盛政をにくむ。勝家いよ〳〵勝豊をうとみて、その外さま〳〵不義の所為あるをもつて、勝豊只今秀吉に属す。

十二月廿三日、秀吉、すなはち安土にいたりて三法師殿に歳暮の御礼申て、小袖十重、銀子千両を奉らる。秀吉、又小袖五重、銀子百枚、樽千荷つゝ諸大将にをくり、その家老」（5オ）がたにも小袖二重つゝあたへらる。

同十一年正月元日、秀吉播磨の姫路におもむき、二日に酒肴銀子八木等を諸侍に給はりて春の始を祝給へば、侍方大によろこび面〻酒宴遊楽をいたせり。然れども秀吉は更に休息もなく、右筆三人をめして年〻の恩禄太刀小袖八木等の費を記せ、算用者十人に勘定せさす。その後朝飯を食して臥給ひ、三日の午剋ばかりに眠覚て、気色新につきて鬼とも組と思へる体也。かくて諸士の御礼、神主僧法師等の礼までも、残らずうけ給ふ。

七日、秀吉上洛参内、次の朝大津にいたり、舟にてその夜安土にお

もむき、九日に正月の御礼を三法師殿及び信雄卿」（5ウ）へ申て、五日逗留し、柳瀬わたりを見めぐりて帰り給ふ。秀吉思はく、雪いまだ消つくさぬうちに、先瀧川一益を打て勝家に気をうしなはせんとて、諸軍勢に触めぐらし、我北伊勢に軍を思ひ立たり、をの〳〵はやく近江の草津に出て相待へしと也。諸軍我も〳〵とこと〳〵く草津にあつまりて、秀吉を相待けり。

廿三日、羽柴筑前守秀吉、軍兵一万五千を率して草津にいたり諸軍勢をあつめらるゝに、都合七万余騎、これを三手にわかつ。一手は羽柴美濃守秀長、筒井順慶、伊藤掃部助、氏家左京亮、稲葉伊予守を大将として二万五千余騎を土岐多羅口へさしむけ、一手は」（6オ）三次孫七郎秀次、中村孫平次等を大将として二万余騎を君畑越につかはし、一手は羽柴筑前守秀吉みづから三万余騎にて安楽越にかゝり、岩石谷峰をもいはすをしよせらる。瀧川一益も聞ゆる武勇智謀の名大将なれば、軍兵を分てこれをふせぐ。秀吉軍をすゝめて桑名辺を焼はらふ。瀧川いかりていはく、われすでに軍兵を分て方〻をふせぐ故に、手勢わつかにしてふせく事あたはず。桑名を焼はらはれける事の口おしさよとて、歯をくひしばりてをどりあかりて腹立けれ共、すへきやうなし。小勢をもつて大敵をくづすには夜うちに如はなしとて、日の暮るを待所に、秀吉軍兵に仰せ」（6ウ）けるは、瀧川も武略の老たるもの也。夜うちすべき事案のうち也。をこたる事なかれとて、大籌夜まはりきびしくせられければ、瀧川が謀相違しけり。羽柴小一郎秀長、三次孫七郎秀次は軍勢をとゝのへて、瀧川一益が甥に瀧川義大夫といふものゝこもりし嶺の城にをしつめ、攻たゝかふ。佐治新助が守る所の亀山の城は、秀吉先陣とりまき、閏正月廿六日の早朝に押詰て、柵をやぶり塀をのり金堀をもつて坤の矢倉を堀くづし込いらんとす。城中も命をすてゝ防ぎ戦かふ。瀧川一益聞て方便て退べしといひつかはしければ、佐治は降人に成て城を渡し長嶋へ」（7オ）退たり。義大夫も防ぐべき力なく城をあけのきけり。秀吉、すなはち関安芸守、木村隼人、一柳市介直末、山岡美作守景隆等に仰せて伊勢を守らしめ、二月に秀吉は長浜におもむかれたり。

柴田修理亮勝家は、佐久間玄蕃允盛政を大将として二万余騎をさしそへ、木下辺にをし出す。盛政すなはち諸軍勢と軍評定しけり。前田孫四郎利政、前陣を望みて打出しに、不破彦三、佐久間久右衛門安次、原彦次郎、金森五郎八つゞきてをし出す。大将盛政、後陣としてすゝみ、軍兵を諸城に置てをさへとして守らしむ。かくて柳瀬に陣をとる。」（7ウ）

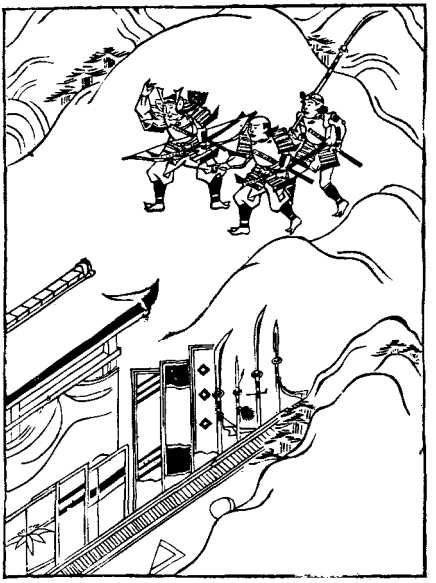
秀吉、このよし聞て長浜を立て志津嶽の辺にいたり、軍を十三段にわけらる。中にも堀久太郎秀政を一番とし、柴田伊賀守勝豊を一番とし、中川瀬兵衛清秀を第十三番とし、秀吉その跡にすゝみて佐久間玄蕃允盛政と対陣あり。両陣の間、僅に十町はかりには過へからず。されども只足軽少〻出して鉄炮打合つゝ、その日は両陣相引に

して止ぬ。

次の日未明に、秀吉は足軽の真似して古老の勇士十余騎をめしつれ、嶺にのぼりて敵陣の体を見て帰りていはく、此軍急に打べからずとて、群兵をして諸城を守らしめ、要害を堅くして、四月朔日に秀吉は長浜に帰らる。」（8オ）

〔挿絵第一図（8ウ）〕

柴田伊賀守勝豊は本山の砦にこめをかれしが、病気おこりて日にしたがひて重なりければ、養性のため京にのぼる。勝豊、すなはちわが家臣山路将監といふものを城中に残し置たりける所に、山路すてに心替りして、城中一方の軍将に木村小隼人といふものを殺して柴田勝家が軍兵を城に引いれんとす。勝豊が旧臣に野村勝二郎返忠して此事顕れければ、山路将監は落うせたり。木村小隼人大におとろきいかつて、山路が母ならびに妻子以上七人をとらへ、秀吉の命によつて磔にかけたり。



挿絵第一図

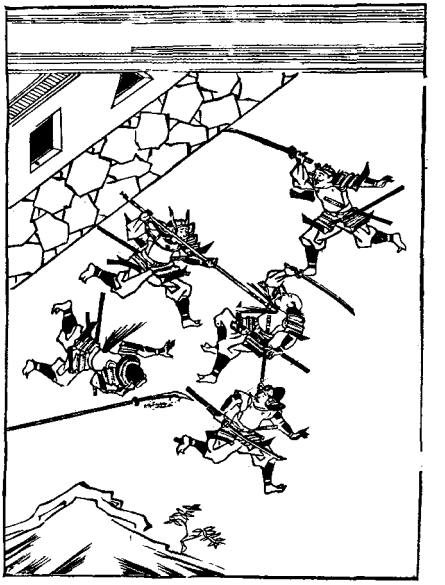
織田三七信孝は、旧冬秀吉と和睦ありしを、又その約」（9オ）をたがへ、柴田勝家、瀧川一益に内通して軍兵をもよほし焼はらはる。秀吉聞て長浜を打立つゝ、濃州大柿におもむきて、急に三七殿を攻らる。

山路将監は佐久間盛政が陣中にありしが、盛政に告ていはく、秀吉すでに美濃におもむく。これ三七殿御心替りありて柴田勝家殿に一味し給ふ故なれは、此度後詰して秀吉を打しりぞけ、三七殿をすくひ給へかしといふ。盛政がいはく、我もかく存すといへども大山をへたてゝ難所なれば、これよりたやすく軍勢を出しがたし、力なき事也と。山路重ねて私語けるやう、敵の要害丈夫にしていつれの城も詰よせがたし。但余語の湖のかたはらは中川瀬兵（9ウ）衛清秀が陣として、要害もおろそかに味方の諸城を遠くはなれたり。謀は不意を打にしかず。いそぎ中川が陣を打給へかしといふ。盛政、げにもと思ひ勝家に告たり。勝家も然るべしと思ひていはく、左あらばわが軍兵をもさしそゆべし。前田利家、利長、原彦二郎、安井左近等をもつて敵陣に対して守らしめ、盛政は急に中川が陣に詰かけ軍をはらば、早速に引帰るべし。構へて滞て遅々すべから

ずといへり。盛政うけがひ、一万余人を率して余語の入湖のほとりにいたる。不破彦三、徳山五兵衛、佐久間久右衛門安次先陣也。中川瀬兵衛が兵、をのれが馬に水を飲とて湖の辺に出たるを、盛政が軍兵かけよせ」（10オ）てうたんとす。かのもの逃帰りて中川にかくと告たり。清秀と高山右近その勢六千余騎と、不破彦三、佐久間久右衛門と大にたゝかふ。盛政は軍兵一千余人を分て城の後にまはし、城下の家に火をかけ焼立しに、中川、高山が軍兵度にまよひて乱れしかば、高山右近は逃おちて美濃守秀長の木本の陣にかけ入たり。中川瀬兵衛一命をすてゝふせぎたゝかふ。かくて城中わづかに六百余人、漸引色になりしかば、北国勢勝にのりて攻のぼる。瀬兵衛、小姓馬まはり五六十人にて、突て出つゝ追出しせめ入けり。よせ手の大勢あら手を入替〳〵せめしかば、城中の兵、或はうたれ、或はいた手をふて残りすくなふ成しかば、詰の」（10ウ）城に引のぼるところに、よせて声〻によばゝりけるは、いかに中川殿、きたなくも敵に後を見せたまふものかな。引返して勝負あれかしといふ。瀬兵衛いとゞ無念にやおもひけん、心得たりとて鑓とりなをし、近づく敵五、六人突ふせたり。佐久間玄蕃允が郎等に、近藤無一といふものにくまれて、中川瀬兵衛うたれければ、城はつゐに落たり。盛政大にいさみほこりて、清秀が首を柴田がもとにをくりつかはす。勝家はなはだよろこび、いそぎその陣を引とりて帰れと使を立る事、五、六度に及ぶといへども、盛政更に帰らず。猶この所に陣とりてひかへたり。」（11オ）

〔挿絵第二図（11ウ）〕

盛政等、大勢にて中川瀬兵衛をせむる事急なるよし、秀吉聞給ひ、大柿には軍兵をのこしをきて、みづから美濃より直に志津嵩柳瀬の辺におもむき給ひしかば、日すでに暮がたになりぬ。軍兵一万五千余騎、藤川につく所に、村里の百姓等松明手ごとにとりもちて奉る。長浜の者共は、酒肴、餅、赤飯、馬秣、糠、藁、山のごとくもち出て、秀吉にまいらせたり。秀吉大によろこび、滞ことなく志津嵩につきて、城ごとに人をつかはし、柳瀬おもてに出べきよしを相ふれらる。丹羽五郎左衛門尉長秀は、江州坂本の城を出て志津嵩の城



挿絵第二図

に入たり。

佐久間盛政等は、はるかにをし来る敵陣の松明おび」（12オ）たゝしきを見て、すはや羽柴筑前守秀吉、大軍にてよせ来るといふ。ほどこそあれ、陣中乱れ騒ていそぎ引はらはんとひしめきたり。原彦次郎、安井左近を殿として引ける所に、秀吉の先陣をしつめて戦かふ。盛政は一万五千余騎を率して志津嵩の北なる嶺にとりのぼりて、使を柴田三左衛門勝政がもとにつかはす。勝政三千余騎にてはせ来り、盛政とひとつにならんとするに、秀吉の大軍すゝみ来りて、鉄炮をうちかけ矢をはなつ事雨のごとし。勝政ふせぎかねて軍兵乱れかたふく。秀吉すなはち軍兵をいさめてうたしめらる。福嶋市松正則、一陣にすゝみ首を取て秀」（12ウ）吉に奉る。加藤虎助清正おなじく孫六嘉明、平野権平長泰、脇坂甚内安治、糟屋助右衛門、石川兵助、片桐助作直盛以上七人、鋒をそろへてすゝみたゝかふ。世の人これを柳瀬の七本鎗と名づく。佐久間玄蕃允盛政は、拝郷五左衛門をまねきていはく、先陣すでにかたふき立て乱れたり。汝いかにもはからへといふ。拝郷かしこまりて引返す。浅井吉兵衛、山路将監、宿屋七左衛門おなじく帰し合せけるが、拝郷真先にすゝみ、石川兵助とわたし合せ諸友に打死す。秀吉の軍兵勝にのりて敵を追かくる。盛政は軍勢をさしまねく。原次郎がいはく、敵勢は弥重なりて谷よりのぼり峰にあつまる事雲霞の」（13オ）ごとく、味方は凩のさそふ枯葉にて後崩すべしとみゆ。只ねがはくは一合戦あれかし。秀吉たとひ何十万騎なりとも某先陣すへしといひけれども、盛政更に用ひず。案のごとく秀吉の軍勢は見るが内におひたゝしくあつまりかさなりしを、盛政が軍兵ども、おどろきおそれ後崩して乱れさはく。丹羽五郎左衛門長秀、此よしをみて、時分は今ぞかゝれ〳〵と呼り、鬨をつくりてをしかゝる。北国勢の後陣すでに乱れて散々になりしかば、玄蕃允盛政も惣敗軍に成て、柴田三左衛門勝政打死す。

柴田修理亮勝家は、盛政が敗北せし事を聞て大にいかりていはく、余語の陣をいそぎ引とれと使をたてしは」（13ウ）爰の事也。軍法に闇き故にかく敗軍はせし也。さらば我一軍せんとて軍兵を点検するに、みなおちうせてわづかに三千余騎には過ず。されども勝家は勇気更にたゆまず、よし〳〵弱き奴原臆病神の付たらんは足まとひになるものぞ。軍の習ひ、勢の多少によらず只軍兵の心ざしを一になすをもつて敵をば打なびくるものぞかし。すゝめや者どもといさむれども、残りとどまる軍勢ども、いとど不興の色あり。爰に毛受勝介いさめていはく、味方の天運すてにかたふきたり。たとひ戦かふとも功をなす事あるへからす。雑兵の手にかゝりて討れ給はんは口惜かるべし。只」（14オ）ねがはく、北の庄に引こもり御自害あるべし。それがし御諱を犯奉り、敵をふせぎて打死せんといひければ、勝家げにもと思ひ、大にその忠義を感じ、我も忠あらんともからは勝介にくみせよとて、北の庄に帰られたり。すでに秀吉の軍勢、

しきりに追来りてせめかゝる。毛受勝介は待まうけたる事なれば少もさはかず、相したがふ軍兵三百余騎を左右に立て名のりけるは、此年比天下にかくれもなき鬼柴田といはれし修理亮勝家こゝにあり、首とつて高名せよやとて、突て出る。勝介が兄に毛受茂左衛門尉おなじく一所に相戦かふ。敵軍ひらきなびきしかども、新手入替りへ」（14ウ）せめ合ければ、三百余人のものども、或はうたれ、或は手負て残りすくなふなりければ、今はこれまでなりとて毛受兄弟腹かき切て臥たり。

柴田勝家は越前の府中に来り、前田父子に対面し、年来軍功の苦労を一礼して、湯漬を食し酒のみて心よく笑て立出つゝ、北の庄に帰り、柴田弥右衛門尉、小嶋若狭守、中村文荷斎徳庵、同与左衛門尉、松平甚五兵衛尉等をめしあつめ城中の手くばりをせさせらる。

秀吉、すでに透間なく堀久太郎秀政を先陣として追ゆくほどに、その日の暮がたに府中につき、脇本辺まで錐を立るあき地もなく軍兵ひしと陣どり」（15オ）たり。軍法の掟を陣中にふれまはし、明がたのくらまぎれに城をとりまきけるを、城中より鉄炮をもつて打出すに寄手おほく討れけり。

柴田権六、佐久間玄蕃允盛政は、志津嵩敗軍の後賀州に落かくれたりしを生捕ぬ。秀吉すなはち山口甚兵衛、副田甚左衛門に預をかる。城中此由聞ていよ〳〵勢力をうしなふ。夜に入て勝家は城中の一族他家の軍士をあつめ、酒宴をはじめ数盃をかたふけていはく、我すでに藤吉猿面郎にほろぼさるゝ事そのうらみ浅からす。明日ははや浮世の隙をあけぼのゝ雲となり、黄泉の鬼客とならん。今夜酒飲て人間世の思ひ出にせんとて、数剋」（15ウ）をうつしける所に、夜すでにあけしかば、四月廿四日、殿主に火をかけ妻の小谷殿（信長公の妹也）以下男女三十余人、一時の煙とのぼりつゝ、城は焦土の野原となりたり。

廿六日、秀吉それより賀州尾山にいたり、前田利家に石川河北二郡を給はり、金沢の城を守らしめらる。利家は柴田勝家に与せし人なれども、そのかみ秀吉と別魂の心さしを通せられし故なり。越前加賀の内、能美恵那二郡を丹羽長秀加増あり、越前守になさる。此たび軍功の勧賞也。

秀吉美濃におもむき、織田三七信孝の岐阜の城をとりかこまる。信孝は、勝家を後詰のたよりに頼みてこそ謀」（16オ）反の色は立られけれ。柴田すでにほろびしかば、城中の軍兵落うせ力よはくなりゆきたり。信雄卿は尾州の軍勢を率して、おなしく岐阜の城にをしよせ使をつかはしていはく、はやく城を出て尾張に来るべしと。信孝すなはち城を出て舟に取のり知多の宇津美にいたらる。信雄卿の郎等に中川勘右衛門といふものをつかはして、信孝に自害をすゝめければ、力なく腹切て死せらる。

五月三日、秀吉すでに江州坂本に帰陣あり。諸将軍士みな端午の祝義申す。浅野弥兵衛長政に仰せて、佐久間玄蕃允盛政、柴田権六を

京都に引渡し、六条河原にして首をはねらる。佐久間盛政、大音声をあげ諸」（16ウ）人に向て云やう、我此程余五の湖の要害にして中川瀬兵衛を打とりける所に、勝家の下知にまかせ軍勢を引とらは、いかでかかゝる事に及ばんや。軍功にほこらずして戦克なは、秀吉をころさん事今かくのごとくすべきものをといふ。聞人大に其勇気のをくれざる事を感ず。かくて盛政、権六誅せらる。瀧川左近将監一益は、さしも武勇の名高く、世の人おそれおもむじけるか、信孝、勝家に心を通じて一味せし所に、信孝、勝家皆亡びしかば、力を失ひいきほひ衰へて降人に出られたり。秀吉、年来の好を思ひなだめゆるして越前の国大野と云所にうつして住しめらる。威力つき果て幽かなる有さま、そのかみにも似ず。老麒つながれて槽櫪の前にあるがごとし。」（17オ）

〔挿絵第三図（17ウ）〕

七月朔日、秀吉すでに加藤虎助清正（後に主計頭と号す）は肥後守になされし又、加藤孫六郎嘉明（後に左馬助と号す）、福嶋市松正則（後に左衛門大夫と号す）、脇坂甚内安治（後に中務大夫と号す）、平野権平長泰（後に遠江守と号す）、片桐助作直成（後に車市正と号す）、糟屋助右衛門（後に内膳正と号す）、右の六人に軍功の賞をおこなはる。そのかみ僅に二百石の禄をうけしに、今をの〳〵五千石を給はる。俄に富貴にいたる事諸軍士みならやみつゝ、弥軍忠をはげまさん事を思へり。柳瀬おもての七本鎗にて、石川兵助一陣にすゝみて打死す。若命あらばその第一に賞ぜらるべし、惜哉。

挿絵第三図

秀吉すでに城を摂州大坂に築給ふ。この年参議に任じ従四位下に叙す。」（18オ）

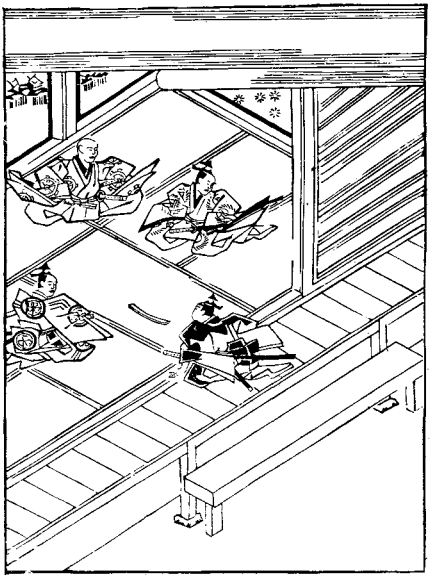
同十二年の春、信雄卿、すでに秀吉の威勢にほこる事を妬てほろぼさんとする心ざしあり。然るに、信雄卿の家臣に松嶋の城主津川玄蕃允、星崎の城主岡田長門守、刈安賀の城主浅井田宮丸みな武勇のほまれ世にたかし。秀吉ふかく心ざしを厚くしてむつびちなみ申されしを、信雄卿に讒言するものあり。此三人秀吉と心をあはせて君をかたふけんとする企ありといふ。信雄卿うたがひをおこして長嶋の城にめしよせて、三人ながら殺されたり。星崎の城に此由聞て、長門守が弟勝五郎大にいかり、軍兵をあつめて楯ごもる。信雄卿つ

ら〳〵心に思はく、秀吉さだめて此事をいかり、我にむかつて」（18ウ）旗をなひかし弓をひかんかと。此故に使者を　東照大権現のもとにつかはして、ひらに頼むよし仰らる。　権現大にうけごひ給ふ。又使を池田勝入、森武蔵守長一につかはして一味せらるべきのよし頼まれたり。これよりさきに、秀吉より尾藤甚右衛門をつかはして懇に礼義をつくされけり。池田勝入いづれの方に与力同心すべしとも思ひさだめず、片桐半右衛門にかたりていはく、我年久しく信長公の恩をかうふりぬ。今は信雄卿にくみして恩を報ぜんとおもふはいかにと。片桐がいはく、まことに義の道を立べくは仰せにや及ぶべきと。其時伊木清兵衛すゝみ出ていはく、それがしかの秀吉のありさま」（19オ）を聞及ぶに、これ天下の大器量ある人なりと覚えたり。只おなじくは秀吉にしたがはんに過べからず。これ身を全し国ゆたかにして、子孫のため家さかへん。若信雄卿にしたがはゞ、身あやうくして国うしなはれ、子孫ほろぶるに年をこゆべからず。たとひ恩を思ひ義をまもるといふとも、家ほろぶるにいたりては子孫絶て名をうづもらさん。君よく思案あるべしと申す。勝入猶も心さしを思ひさだめず。然る所に秀吉の方より津田隼人を使としていはく、美濃尾張三川三ヶ所を領知あるべし。此事已後までもたがふへからずと誓言をもつて申こさる。勝入いよ〳〵心まどふ。伊木清兵衛つよくいさめ」（19ウ）てすゝめける程に、勝入つゐに秀吉に付れたり。片桐半右衛門これをあざけり笑ていはく、義にそむき恩をわするゝ人なり。我更に勝入にしたかはじといふ。森武蔵守長一も秀吉に一味しけり。

東照大権現、軍兵を率して尾州の清洲にいたり、信雄卿に対面して、秀吉たとひ攻来るとも防ぎしりそけん事たなごゝろの内にあり。君御心をいたましめ給ふ事あるべからずと也。尾州犬山の城は信雄卿の家臣中川勘右衛門これをまもる。中川すでに信雄卿の勢州長嶋の城におもむき軍の相図手賦をさだめてかへる道にして、池尻平左衛門出合て両人ともにうち死す。」（20オ）

〔挿絵第四図（20ウ）〕

犬山の城に大将なく成ける事を池田勝入聞て、犬山の里人をまねき



挿絵第四図

て城の要害よく聞すまして、紀伊守之助と軍兵を一に合せて犬山の城にをしよせ急にせめ落さんとす。中川が叔父清蔵主、大に戦て打死す。勝入つゐに犬山を乗とり、猶すゝみて小牧山の近辺にいたり、在家を焼はらひて早々引とりぬ。

大権現は信雄卿と清洲の城におはして、小牧辺に火ありと聞給ひ、これ必す池田勝入がはたらきけるならんとて、軍兵を率して打むかひ給へば、勝入はすでに兵をいれて引とりける跡也ければむなしく立帰る。それより又軍兵をとゝのへて犬山の辺におもむき、森」（21オ）武蔵守長一が羽黒に陣とりて居たるを見て、酒井左衛門尉忠次、奥平美作守信昌、松平紀伊守家信等五千余騎をさしむけて、森長一と戦かはしめらる。長一打まけて敗軍す。池田勝入父子、稲葉伊与守子息右京亮等、軍兵を率して犬山に軍立し、長一が敗北せしを聞てすゝみて戦かはんとす。或古老の兵、勝入が馬をひかへていはく、敵軍すてに勝にのりていさむ。我らすゝみてこれをうつに利あるへからず。只待うけて戦かはゞ利あるべしと。稲葉伊与守がいはく、我先陣して敵をうつべし。敵は疲て味方は新手也。勝べき事眼前にありとて鑓打ふりいはく、老の波を血の川に」（21ウ）湛ものをといさみければ、諸軍聞て大にわらふ。

勝入か軍兵をし来るを、大権現見給ひて、新手の大勢にかけあはん事味方の労軍勝にほこらば是必らず敗をとるの端なりとて、兵を引て帰給ふ。勝入等　大権現の弓矢のしまりたる事を感じて、おなしく又引返す。榊原小平太康政、すゝみ出て小牧山を陣所とせんと申す。　大権現ゆるし給ふ。信雄卿おなしく小牧山におはします。急て蟹清水、外山村、宇田津村等の砦を修理し、小幡の古き要害を築て兵ををきて守らしむ。

秀吉此よし聞て、尾藤甚右衛門がもとに飛脚をたて」（22オ）ていひつかはされけるは、敵兵たとひ合戦すへしとひしめくとも、必らずそれに立合て兵を出すべからず。池田勝入、森長一は武勇の名に矜て敵をあなとる癖あり。汝かたくこれをとゞめよといひつかはされたり。

秀吉すてに大坂を立て犬山におもむかる。軍兵十二万五千余騎也。角て犬山にいたりて、それより楽田羽黒の辺にをしつけ、小牧山の敵陣に対しておほく子城を構へ、二重堀の城には日根野備中守弘就、舎弟次右衛門二千余騎にてまもらしめ、岩崎山の城には稲葉伊与守、子息右京亮貞通等四千余騎、小松寺の城には丹羽五郎左衛門長秀八千余騎、青塚の城には森」（22ウ）武蔵守長一三千余騎、内窪山の城には蜂屋出羽守頼隆、金森五郎八三千余騎、その外村々嶺々、みな陣所として軍兵さながら雲霞のことし。

四月に、池田勝入、その家老軍士をあつめて議していはく、敵兵大半は小牧山にあり。我つら〳〵思ふに、三川国は軍兵残りなく出たる跡なれは、国中には手むかふものあるべからず。此時をうかゞひ、三河に乱れ入て国中の村里在々所々を焼はらはゞ、小牧山の敵軍共

おどろきさわぎ、故郷の妻子の事を嘆かん。然らば敗北すべき事掌をさすがことくなるべしと。家老の臣等尤也と一同す。勝入やがて犬山に行て秀吉にか」（23オ）たりければ、秀吉も甘心あり。さらば明日東三河におもむき在〻を焼はらひ、篠木、柏井に城をかまへ兵を入て守らしめ、敵国に夜打をいたしなば、敵かならずまどひおそれて退屈すべし。敵を侮ことなかれ。備を乱してすゝむ事なかれとて、勝入を返されたり。秀吉、又増田仁右衛門長盛をもつて仰さるゝは、池田勝入軍兵を三川にすゝむ。三好孫七郎秀次一万余騎、堀久太郎秀政五千余騎、その外兵を加勢して勝入をすくひ、勝入が下知にしたがふへしとて、勝入父子にも此赴をいひつかはされ、秀吉又犬山を出て楽田に陣を居らる。かくて池田勝入、子息紀伊守之助、森武蔵守長一、三好孫七郎秀次、堀」（23ウ）久太郎秀政をの〳〵軍兵を率して篠木、柏井にいたり、参州の地にをしいらんとす。篠木の代官より小牧山に告来る。

東照大権現此よし聞給ひ、酒井左衛門尉忠次、石川伯耆、本多平八郎忠勝等をば小牧にとゞめて陣を守らしめ、大須賀五郎左衛門康高、榊原小平太康政、本田彦次郎康重、水野惣兵衛、丹輪勘助氏次をもつて先陣として、小牧山を打立て長久手の辺にいたらしめらる。軍兵都合四千余人なり。次に又、本田豊後守広孝をもつて龍泉寺の辺におもむけて、敵陣の有様を見せしめらる。かゝる所に池田勝入等、すなはち丹輪勘助」（24オ）か岩崎の居城をとりまきて攻るにはなはだ急なり。勘助が弟次郎助ふせぎたゝかふて打死せしかば、城落たり。勝入大によろこぶ。此時にあたつて　東照大権現は小幡にいたり給ふ。大須賀康高、榊原康政、本多康重、水野惣兵衛、丹輪勘助と三好秀次と相戦かふて大に打破る。秀次かなはずして落ゆく。康高康政等勝に乗て追かけつゝ長久手辺にいたる。秀次が郎等に田中久兵衛といふもの、堀久太郎秀政が陣にはせ来りていはく、三好秀次只今敵軍と戦かふて大に打まけられたりと。その詞いまたおはらざるに、秀政眼をいからし大に叱ていはく、汝は何とて愚なる」（24ウ）事を申来れるや。我推量するに、汝更に軍の事を我にしらせんために来りたるにてはあるべからず。軍のおそろしさにげ落て来れるならんと。恥しめられて田中久兵衛赤面して物いはず。少頃ありて敵兵をし来りて田中をうたんとす。田中がいはく、我まづ三好秀次に問て後に軍をばすべきそやとて、鞭鎧を合せて跡をも見かへらず逃さりぬ。諸軍大にわらふ。堀久太郎秀政此よしを見て軍をとゝのへ備を立て相待所に、大須賀康高、榊原やすまさたう、秀次を追事一里計にして、堀久太郎秀政横合より突てかゝるに逢て、大須賀、榊原等なび」（25オ）き乱れんとす。本田彦次郎康重、こゝを破られては大事也とて命をすてゝ戦かふて、痛手うす手七ヶ所をかうふりぬ。敵もさすがに戦かひ疲れて両方に引別れたり。池田勝入その子紀伊守、森武蔵守軍をすゝめてをし来る。　東照大権現その寵臣伊井万千代直政等後に兵部と号す、四千余騎を率して長久手の

巽の方の山にくり出し、三手に分て備をたて弓鉄炮を乱れはなつ事雨のごとし。池田、森が軍兵打立られ馬の足を居かねたり。森武蔵守長一真前にすゝみてかけ乱さんとする所に、鉄炮に眉間を打くだかれ馬より逆に落て死ければ、諸軍」（25ウ）大に乱れ勝入が軍兵も散々になりて備をくづしけり。勝入が郎従秋田加兵衛、梶浦兵七郎、片桐与三郎、竹林小兵太、すでに勝入がうたれんとするを見て返し合せて万千代直政が軍兵とふせぎ戦かふて打死す。永井伝八（後に右近と号す）直勝生年廿二、みづから鑓をとりて勝入とたゝかひついに勝入をつきふせ首とつてさしあげたり。安藤彦兵衛直次（後に帯刀と号す）、池田紀伊守之助とわたり合て之助つゐに打れたり。池田丹後守はこれをもしらでたゝかひしが、勝入、之助等みな打れたりと聞てやがて落て帰る。爰にをひて　大権現と信雄卿の軍兵を一手になして逃るを追ことはなはだ急なり。追打に敵の首数多とりて勝鬨を」（26オ）あけて引返し給ふ。これ本多佐渡守正信、内藤四郎左衛門正成がいさめける故也。秀吉大軍の新手にて備たり。勝にのりて長追をせば味方疲たる軍兵なり、かならず大なるをくれをとるべし。只是より返し給へと申ければ、けにもとて則小幡の郷に引返し給ひけり。秀吉すでに勝入父子、長一以下打れたりと聞て、楽田を打立つゝ備を立て龍泉寺につき給ふ。木村小隼人、一柳市介直末等はせ付てしたがふ。直に長久手にすゝみて戦かはんとせらる。敗軍の者ども来りて　大権現、信雄卿みな引返し給ふといふ。秀吉のいはく、我勝入をいましめて、汝かならず敵を侮事なかれ、勝にのりてほこる事なかれといひし」（26ウ）〔挿絵第五図（27オ）〕こと葉を用ひずして、今かくのことし。口惜きことかな。これより小幡におもむき大権現と一戦をとけ、勝入、長一が吊軍にせんとて馬をすゝめらる。稲葉伊与守等馬の口にとりつきて諫けるは、日すでに暮かたになり、敵また引こもれり。味方の利をうしなはん事うたがひなし。軍は今日にかぎるべからず。先引入給へと諸軍一同に申ければ、秀吉怒をゝさへて帰り給ふ。此時本多平八郎忠勝わづかに二、三百人ばかりを率して、秀吉の大軍と四五町をへだてゝ打並て小幡にゆく。秀吉の先陣これをうたんといふ。秀吉ゆるし給はず。忠勝更におそ

挿絵第五図

れたる色なし。勇気いよ／＼武くし」（27ウ）てつゐに小幡にいたる。世の人ほめぬものなし。和睦ありて後に秀吉大に平八郎をほめていはく、忠勝が武勇その分量を知がたし。しかれども長久手の帰るさに小勢をもつて我が大軍に打並びて行ける事は、武勇の気はなはだ常の人に過たりと大にほめ給ふ。聞人みなうらやみ思ひけり。石川伯耆守は　大権現股肱の臣也。しかるを心さしを秀吉に内通せしかば、酒井左衛門尉忠次これを見とかめてその裏切せんかとあやぶみて、秀吉の軍をうたずして引退給へり。

秀吉、すでに犬山の坤の方にあたりて奈良高田と」（28オ）いふ所に城をかまへて、長谷川藤五郎秀一、稲葉右京亮貞通をもつて守らしむ。

秀吉、羽黒の旧塁を築て山内猪右衛門、伊藤掃門助、堀尾吉晴を居て守らしめ、小牧山に対して子城十余ヶ所をかまへて、美濃国戸嶋にいたりて羽柴小吉を居て城主とす。

秀吉、軍兵六万余騎を率して青塚の辺にいたり、二重堀の砦をとりはらふ。木村常陸介、神子田半左衛門、小寺官兵衛、明石左近なをこれを守る。敵兵をそひ来りて打しりぞけんとす。細川越中守忠興が兵これを破る。その夜秀吉すなはち神子田半左衛門をめし」（28ウ）ていはく、今日の軍に汝いかなれば戦に力をつくさゝるると。神子田がいはく、手の軍兵少故に心のまゝに働得ずといふ。秀吉いかりていはく、汝初め我に属するときは郎従わづかに十人にだにも足ず。今の手の者はそのかみよりおほき事何増倍そや。それに人数すくなしとて働かざるは心あるかとて、秀吉それより神子田を疎悪て後につゐに打ころされき。

五月、秀吉すでに堀久太郎に楽田を守らしめ、加藤遠江守に犬山の城を守らせ、秀吉みつから美濃におもむき富田の寺内に陣を居て、加賀野井弥八郎が守る所の城をせめらる。信雄卿此よし聞て、千草三郎左衛門、」（29オ）浜田与右衛門、小泉甚六、楠十郎、林与五郎、その子十蔵、小坂孫九郎、その兵二千騎をつかはして加勢せらる。秀吉急にせめつけらるゝに城中こらへずして降参す。秀吉更にゆるさず。いよ／＼急に攻られしかば、城中大に困む。一日、大雨降くらしけるに、夜に入て城の兵ども門をひらきて打て出んとす。秀吉の兵相むかひ、一人ももらさじとせめたゝかふに、突くづし／＼逃落る。跡に後るゝものはみな打殺され生捕る。千草三郎左衛門、林十蔵、加藤太郎右衛門は打死す。楠十蔵は生捕る。浅野弥兵衛長政これを申なだめて命をたすけんとす。秀吉うけかはず。つゐに首をはねらる。」（29ウ）

秀吉、軍兵をすゝめて竹鼻の城をせめらる。城主不破源六これをふせぐ。秀吉は城の体を察して、四方に長堤をつき木曽川をせき入らる。水すでに城をひたし、蛇、蛙、鼠数百千あつまる。源六降参す。秀吉ゆるして城をとり、一柳市介直末を城主として居られ、それより多芸におもむき、直江村に砦をかまへ丸毛三郎兵衛を居て、後に

大垣に帰らる。

瀧川左近将監一益は、柴田修理亮勝家ほろびて後は越前にかくれ居たるを、秀吉その武勇の名たかき事をおしみて伊勢の神戸に居しめらる。瀧川一益、このほど秀吉と信雄卿と軍にとりむすぶと聞て、」（30オ）尾州蟹江の城主前田与十郎に使をつかはしていはく、必らず忠節を秀吉につくさるへし。しからば家門のためよろしかるへしと。前田これにしたがふ。瀧川一益は九鬼右馬允嘉隆と共に舟にのりて蟹江城に入たり。大権現、信雄卿、此よし聞て軍兵を率して蟹江の城にとりかけ急にこれをせめらる。酒井忠次、榊原康政大に軍功をはけます。瀧川一益ふせぎかね、力つきはてゝ前田与十郎が首を切て降人に出たり。一益それより伊勢にかへりけれども、比興の為也と諸人わらひあざけりしかば、恥かしく思ひて京にのぼる。爰にも足をためず丹波に逃くだりぬ。秀吉は蟹江の」（30ウ）軍を聞て瀧川をすくはんとて大垣を立給ふ。一益城を落たりと聞て、秀吉直に京都に帰りのぼらる。大権現も遠江に帰り、小牧の城には榊原康政をのこして守らしめらる。

秀吉、又伊勢におもむき羽津に陣とり、信雄卿も長嶋桑名に陣とり給ふ。

秀吉すでに富田左近津田隼人にかたりていはく、我は信長公の大御恩を雨山にかうふりし事こと葉につくしかたし。かくて明智日向守光秀を誅罰す。信長公さだめて眉を黄泉の底にひらけ給はん物をや。それに信孝、信雄みな我を怨てころさんとし給ふ。是何事そや。されとも我已こ」（31オ）とを得ずして軍を出して是をふせぐ。是只身の難をのがれんがため也。更に我本意にはあらず。信孝は運つきてすでに死し給ふ。我今ねがはくは信雄卿と和睦せんことをおもふ。此事叶はゝ我か身のよろこひ何事かこれにまさらん。汝たちよきやうに相はからはれよと也。富田、津田ふかく感じて洟を流し則桑名の陣に行て信雄卿に申いれしかば、此上は和ぼくあるべきと仰せあり。両人よろこひて立帰りければ、秀吉もはなはだよろこび給ふ。十月廿日、矢田川原にして秀吉と信雄卿と和ほくの対面あり。秀吉大につゝしみ手をつかねて膝をかゞめ、なみたを流してしはらくもの申されず。」（31ウ）

〔挿絵第六図（32オ）〕

かくて御太刀を献て秀吉立帰らる。これより両陣の諸軍万歳をうたひ大によろこびあへり。秀吉すなはち犬山の城を信雄卿に返し給ふ。十一月廿二日、秀吉を権大納言に任じ従三位に叙す。この年、秀吉、信雄卿おなじく　大権現に申入らるるおもむきあり。これによつて

大権現その子息秀康を（後に三川守と号す）上洛せしめ給ふ。時に年十一歳なり。石川伯耆守が次男勝千代、本多作左衛門重次が子仙千代を（後に飛弾守と号す）相そへらる。秀吉のたまはく、秀康はこれわが養子にすべき也とて、羽柴氏をまいらせらる。実には　大権現の武勇なるをもつて腹黒なる」（32ウ）事もやあるべきとうたがひて、人質とするがため也。

挿絵第六図

そのゝち石川伯耆守は京にのぼりて秀吉卿につかへ奉る。時の人みなその後ぐらき事をそしり、口にはさだかにいはざれどもをの〳〵石川をあざけり思ひけるとかや。

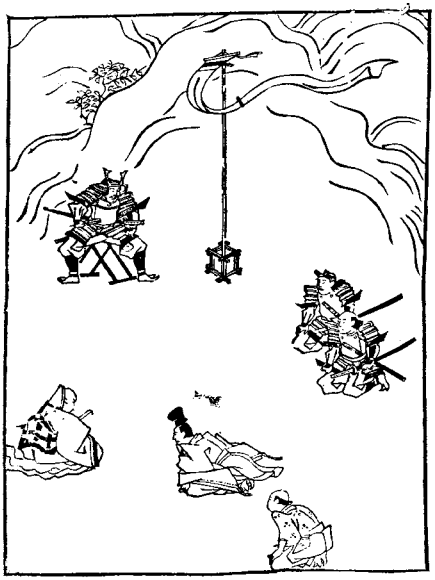
同十三年三月、秀吉内大臣に任じ正二位に叙す。是よりさきには秀吉みつから平氏を称せられけるを、内大臣に任せられてより藤原氏にあらため称せらる。紀州根来寺の法師等武命にしたがはず。秀吉卿軍兵を率してかれら退治のためはせむかひ給ふ。大和大納言秀長（秀吉の舎弟）、羽柴中納言秀次（実は三位法師一路斎が子なり。初め三好山城守が養子として三好孫七郎と号す。後に秀吉養子とし給ふ。）を副将軍としておもむかる。根来の僧此」（33オ）よし聞て、岸和田辺に千石堀と積善寺と浜城と三ケ所の要害をかまへてこれふせぐ。秀吉すなはち秀次を千石堀にむかへ、長岡兵部太輔藤孝、その子与一郎忠興、蒲生忠三郎氏郷を積善寺にむかへ、中川藤兵衛、高山右近を浜の城にむかはしむ。堀左衛門尉秀政、筒井順慶、長谷川藤五郎秀一は、別に一万五千の軍兵を率して直ぐに根来寺にむかふ所に、千石堀より兵五百人横合に堀秀政等が軍中に打てかゝる。羽柴中納言秀次此よしを見て、兵をすゝめて秀政等とひとつになりて根来の五百人を前後よりさしはさみてうつ。根来方、立足もなく追くづされ、千石堀に逃こもる所を付入にせんと」（33ウ）するに、城中かたくふせぐ。堀は深し要害はよし、たやすくせめ落すべきやうなし。筒井順慶が手より火箭を射こむ事雨のごとし。その火すでに城中鉄炮の薬筥に入ければ、城中俄に火もえ出て焼くづれ焼死するもの一千六百余人なり。積善寺も浜の城もみな逃落たり。秀吉猶兵をすゝめて根来寺をせめらるゝに、寺中おほくはみな老僧児喝食なり。よき武者共は千石堀、積善寺、浜城につかはしをきければみな落うせたり。今はふせぐへきやうなく、あはてふためき仏像、経巻、什物をもとりのくる隙なく散〻になりぬ。寄手の先陣、門前にして時をつくれども出合ものなし。」（34オ）軍兵寺院に乱入て金銀什物を濫妨して俄に得付たるものもおほかりし。

秀吉それよりすゝみて雑賀にいたる。大田村の城に敵兵三千余人こもりて道を妨ぐ。秀吉のたまはく、急にすべからずとて、三月廿四日、城の四方に長堤をつき吉野川を堰入しかば、城中これに力をう

しなひ降人にならんといふ。城主ならびに武勇の名あるもの百五十三人自害して秀吉卿に城を退渡す。秀吉すなはち中村孫平次を居て守らしめ、それより熊野山中の一揆をうたんとてすゝみ給ふ所に、新宮本宮の社人、其外村々里々の人民百姓等をの／＼手をつかね膝」（34ウ）ををりて降参しけり。秀吉公のたまはく、熊野には関役の事茂くして旅人商人難義すといへり。今より以後、関役を停止すべしと熊野の別当に仰せ付られけり。秀吉それよりも和哥の浦玉津嶋にいたりて遊覧ありてのち、大坂にかへり給ふ。四月十日、秀吉公高野山の法師等を誡しづめたまふ。寺領の外に横領の地あるを返し、学文を喈て武勇をすて沙門の道をおこなひ、謀反朝敵国法に背く輩山中に隠るゝを抱をくまじきよし三ケ條の制法をさだめらる。同十六日、学侶方検校法印良運、行人方法眼空雄すでに一山の衆議をもつて細井新介に付て請文を奉る。」（35オ）

〔挿絵第七図（35ウ）〕

丹羽五郎左衛門尉長秀卒す。年五十一。然るに長秀、平生積聚の病ありてはなはだくるしむ。此たび起出たるは、こと更に痛堪がたく苦しかりけり。医療その術もかなはず、百薬その功もしるしなし。こゝにをひてみづから刀を引て腹を刺て死す。火葬の後、灰の中に積聚をとりいだすに、いまだ焦つきず。其大さ拳のごとく、形石亀に似て其、啄は尖曲て鳥のごとし。刺貫たる刀の跡、背にあり。秀吉見給ひて、誠に奇物也、医師の家にはかゝる物までもたくはへてあるべき事也とて、竹田法印に給はりぬ。



挿絵第七図

秀吉、四国を退治せんがために大和大納言秀長、羽柴」（36オ）中納言秀次を副将軍とし、六万余騎を率してまづ阿波国におもむき、長曾我部新右衛門が楯ごもりし和気城をせむるに、新右衛門降人に出る。副将軍大和大納言秀長卿軍兵をすゝめて、長曾我部元親が弟安親がこもりし一宮城をせめらるゝに、安親降人となる。羽柴中納言秀次の軍兵とひとつに合せて、桑名左衛門がこもりし木津城をせむるに、一夕雨風はげしきにまぎれ、桑名左衛門夜に乗して逃落たり。仙石権兵衛、兵を率して讃岐にいたり八嶋の城をせめおとしてより、四国すなはち太平になれり。秀吉すなはち阿波を蜂須賀小六

家政に、讃岐を仙石権兵衛に、伊予を福嶋左衛門大夫、戸田民部」（36ウ）少輔に給はる。

秀吉すでに征夷大将軍にならんとせらる。権大納言源義昭にかたり給はく義昭は尊氏の末なり。京都の公方なりといへども天下大に乱れ威力をとろへ給ひ公方はある甲斐なく諸国を流浪せらる。公は貴族の末なり、我は卑賤の者なり。ねがはくは我を養子にし給へ。我まさに大将軍とならん。然らば公も富貴栄花をひらき給はんと也。義昭その天性愚して是非の理に昧くして其こと葉にしたがはず。秀吉大にうらみて菊亭右大臣晴季に相談せらる。晴季のいはく、関白はこれ人臣の高官にして諸人の仰ぐ所の将軍よりははるかに貴事いふはかりなし。只関白になり給へと。秀吉大によろこび給ふ。」（37オ）

七月十一日、秀吉すでに関白に任ぜられて参内あり。織田信雄卿、大和秀長卿、羽柴秀次卿、浮田秀家、前田利家、徳川秀康等扈従せらる。豊臣秀勝、同勝俊大和中納言と号す。大納言秀長の子也。、池田輝政以下みな供奉す。

秀吉公、ある時毛利輝元の家にいたり給ふ時に、源義昭庭の前に立てあり。秀吉公此有さまを見ていはく、義昭〻〻只今はいかに〳〵と。義昭手を束ねて腰を〻り大にうやまへるけしき也。義昭は輝元が家に浪牢して年ををくらるとかや。秀吉を養子の分にせられば何ぞ今かくのごとくにあらんや。

秀吉公、軍を越中国におこし給ふ。前田利家は賀州の」（37ウ）兵を率して先陣せらる。佐〻陸奥守成政初は内蔵助と号す、これを見て方〻の砦を引はらひ、越中外山の城をかためて楯ごもる。秀吉公、能登国石動山にのぼり、軍兵を分て外山の城をせめしむ。佐〻成政ふせぐ事叶はず、富田左近、津田隼人を頼みて降を乞ければ、秀吉公ゆるし給ひ、成政をめしつれて京に帰り、越中国をば前田利長に給はる。

秀吉公すでに前田徳善院玄以、浅野弾正少弼長政、増田右衛門尉長盛、石田治部少輔三成、長束大蔵太輔正家を五奉行とせらる。浅野が妻と秀吉の妻は、同胞にはあらねど姉妹の好あるをもつて、長政内外につ」（38オ）けて預さばく。前田は信忠の推挙に依てなり。長束は往当丹羽五郎左衛門につかへて、分別知慮ふかき事常の人にこえたり。増田、石田は秀吉につかふる事年久し。中にも増田は利漢才覚にして武勇あり。前田徳善院には京の所司代、神社仏寺の事を知しめ、長束には年貢運上の事を知しめ、浅野、増田、石田には諸事の法度を知しむ。大事は五人相談してさだむべし。私欲奸曲酒色にをぼるゝ事なかれ。公事の訟訴詔の事に晦をとるべからず。これらの條制かたく仰せ付られけり。

信雄卿すなはち羽柴下総守勝雅、土方勘兵衛雄久をもつて　東照権現に申つかはさる。我すでに秀吉と和睦せり。」（38ウ）秀吉また貴殿に遺恨なし。只一時のあらそひをなしけるばかり也。此上は貴殿はやく京都にのぼらるべし。秀吉よろこぶのみならず、我も大に悦べき也と。　大権現耳にも聞いれ給はず。信雄卿の弱将浅近の知慮を見かぎり給ふにこそ。」（39オ）